

奈良女子大学構内遺跡 発掘調査概報Ⅵ

— 平城京左京二条六坊十二坪・中世南都・近世奈良町の調査 —

1999年

奈良女子大学

はじめに

奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会（1981年に組織）は、1981年家政学部ならびに一般教養棟の新営工事に先立って行った発掘調査の結果を「奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅰ」として編纂し、1982年発刊いたしました。以来、大学構内施設の新增改築にともなう発掘調査と、その調査結果の公表を逐次行ってまいりました。

このたび、理学部情報科学科棟新設にともなう1993年7月から9月にかけて実施された埋蔵文化財の発掘調査の概要報告書「奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅵ」が刊行されますことは誠に喜ばしいことであります。

今回まとめられた報告書の調査対象は、概報Ⅲ（1985年）、および概報Ⅴ（1995年）の発掘地と隣接した地であります。当該地は、奈良時代には平城京の左京二条六坊十二坪にあたり、都が他に移ってから中世南都や近世奈良町を支える都市の機能をもつ地域として、連続として人々の生活が行われてきた所であります。

このたびの発掘調査は、「奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅲ」にあります理学部棟の調査結果と併せ考えますと、より多くの貴重な新しい知見が得られたと考えられます。古代では、奈良時代は言うに及ばず、平安時代の大規模な建物の発見でこの地域が引続き重要な意味をもっていたことをうかがい知ることができます。また、中世では大規模な寺院の外郭部分として、すでに都市としての機能をもつ生活が営まれていたことの具体的な様相を詳細に考察できますことは意義深いことと考えております。

この概要報告書によって公表されます資料が、学術研究面に有用な資料として提供でき、学内外や専門分野の如何を問わず広く活用されますことを念願致します。この刊行に御尽力頂きました奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会、事務局、臨時文化財調査室の関係各位のご協力、ご支援に深く感謝致します。

1999年1月

奈良女子大学長 丹羽雅子

例 言

- 1 本書は平成5年に奈良女子大学が実施した奈良市北小路町1番地奈良女子大学情報科学科棟（G棟）建設予定地の発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査の実施にあたっては調査員・坪之内徹が現場を担当し、下記の人々の協力を得た。
信田真美世・松尾史子・岡恵子・末永美由紀・松岡愛子・深尾幸代・山崎裕子（奈良女子大学）、
鈴木景二（神戸大学）
- 3 遺物の実測・拓本は小野友記子・保科季子・宮元香織・三熊あき子・山村智美・樺谷綾子・山本美智子が行い、製図は池上佳芳里・篠原美佳・山元章代・深山景子が分担して行った。
- 4 遺構写真・遺物写真ともに坪之内が担当した。
- 5 本書の執筆・編集は松岡・宮川尚子の協力を得て坪之内が行った。但し、Ⅲ-3の漆器碗の項目と実測図は京都大学・本吉恵理子氏によるものである。

凡 例

- 1 層位と遺構の位置は国土座標によって表示している。また高さは絶対高をあらわす。
- 2 遺構の略号、土器の器種分類、軒瓦の型式は奈良国立文化財研究所で設定したものに準拠した。
- 3 遺構番号は発掘調査区内検出のものにのみ付されたもので、既往の調査の通し番号との関連はない。

目 次

I 調査の契機と概要	1
II 遺 構	3
1 層 位	3
2 遺構と時期区分	3
III 遺 物	16
1 土 器	16
2 瓦・埴	22
3 木製品・石製品・金属製品	25

あ と が き

挿 図	図1	調査地点位置図
	図2	調査地点・理学部棟遺構概略図
	図3	包含層出土の土馬その他
	図4	遺構配置図、東壁土層図
	図5	A期の変遷
	図6	SB01実測図・柱穴断面
	図7	SE08実測図
	図8	SE03実測図
	図9	SK12実測図
	図10	B期の変遷
	図11	SX04 (SD01) 平面図
	図12	SX01平面図
	図13	BE83区土坑出土土器
	図14	SE08出土埴 (1)
	図15	SE08出土埴 (2)
	図16	SK19出土木簡
	図17	漆器碗
	図18	石帯
	図19	石鍋
	図20	温石
	図21	銭貨

写 真	図版1	遺構全景・A期遺構
	図版2	中央部・南半部全景
	図版3	B期遺構
	図版4	B期遺構
	図版5	C期遺構
	図版6	土器 (1)
	図版7	土器 (2)
	図版8	土器 (3)
	図版9	土器 (4)
	図版10	土器 (5)
	図版11	土器 (6)
	図版12	土器 (7)
	図版13	土器 (8)
	図版14	軒瓦

付 表 土器観察表

表1	SD14
表2	SK22
表3	SE09
表4	SK11
表5	SK46
表6	SK34
表7	SK35
表8	SE08
表9	SE05
表10	SK07
表11	SE03
表12	SE04
表13	SK19
表14	SE01
表15	SE07
表16	SK15
表17	SK05
表18	SX01
表19	SG01
表20	SD01
表21	SK20
表22	SE06

図 版	第1図	SD14出土土器
	第2図	SK22出土土器
	第3図	SE09・SK11・SK46・SK34・ SK35出土土器
	第4図	SE08出土土器 (1)
	第5図	SE08出土土器 (2)
	第6図	SE05・SK07出土土器
	第7図	SE03・SE04出土土器
	第8図	SK19出土土器
	第9図	SE01・SE07出土土器
	第10図	SK05・SK15・SX01出土土器
	第11図	SG01出土土器 (1)
	第12図	SG01出土土器 (2)
	第13図	SD01・SK20・SE06出土土器
	第14図	軒瓦

I 調査の契機と概要

奈良時代の都であった平城京は東に外京という突出した部分を持ち、この部分に興福寺・元興寺、東に接して東大寺という大寺が連なっていた。都城としての機能が他所に移り、京中心部が田畠と化した後も、外京部分はこれらの大寺を中心に都市的発展を遂げた。すなわち旧外京部分は奈良時代のみならず、現代にまで至る複合遺跡であると言える。

このような周知の遺跡内に立地する奈良女子大学では、校舎建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきており、研究機関の責務としてその結果を様々な形で公開することに努めている。

1993年、構内の西南隅、2つの理学部棟（新B棟・C棟）をつなぐ形で新設の情報科学科棟が建設されることになり、事前の発掘調査を行った。当該地は1983年に発掘調査を行った理学部棟（新B棟）の西に接しており、両地点を併せた広い面積での総合的な調査成果が得られることが期待された。

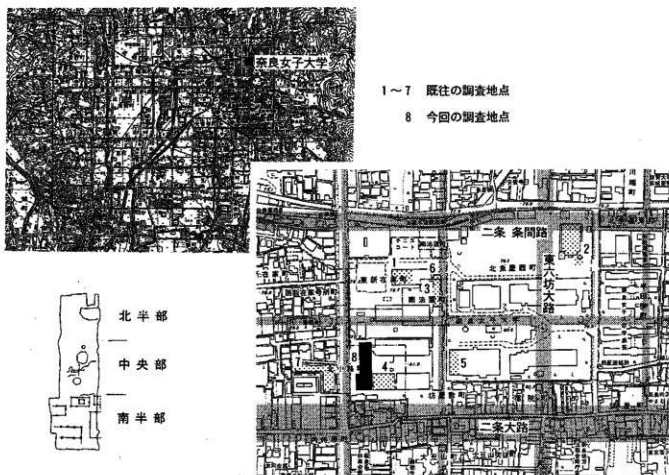


図1 調査地点位置図

(尚、発掘区内を地点明示のため北半部・中央部・南半部に分けた。本概要報告でもこの地区分けを用いている。)

調査は7月19日に開始された。調査面積は約1150㎡である。調査地は東西19m、南北65mと細長いが、北半部は近代以降の造成や校舎建設で大きな攪乱を受けており、顕著な遺構の残存はなかったが、中央部と南半部では奈良時代後半から江戸時代にかけての遺構が重層的に検出された。なかでも10世紀前半の掘立柱建物SB01は部分的な検出であるが、柱間の大きさ、残存木柱の大きさから当該時期の発掘区周辺の特異性を認識出来ると言えよう。例年にない夏季の天候不順のため、調査の進捗状況ははかばかしくなく、遺構検出完了までに8月一杯を費やし、9月4日に現地説明会を行った。井戸枠等の取り上げ作業が完了したのは9月10日であった。

調査日誌 (1993年7月5日～9月11日)

7月5日～16日 発掘調査区の機械掘削。現地地下1.5～2.0mのところから遺構検出をはじめることにする。

7月19日～20日 基準点設定、地区杭打ち。

7月20日～27日 南半部の遺構検出。

7月28日～8月5日 中央部の遺構検出と南半部遺構の精査。天候不順のため作業の休みや中断が多い。

8月6日～12日 北半部の遺構検出と中央部・南半部の精査。雨のため現場作業進まず。

8月17日～31日 北半部から南へ向って清掃も兼ねて遺構の完掘・精査。

23日 池SG01の石敷部分SX01のみ空撮(クレーンによる)。

31日 調査区全体のクレーンによる空撮。遺構写真撮影。

9月1日～5日 柱穴断ち割り。壁面清掃ののち土層図作成。井戸等の遺構図作成。

2日 記者発表。

4日 午後、現地説明会。

9月6日～11日 井戸枠取り上げ、撤収。

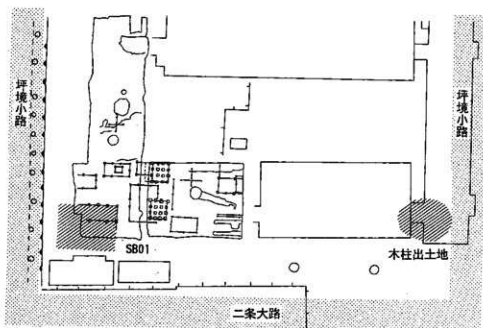


図2 調査地点・理学部棟遺構概略図

II 遺構

1 層位

発掘区の地形は南から北に向って傾斜し、東から西に向っても僅かな傾斜が見られる。しかし、大学構内は造成と建物建設のために旧来の斜面を認識しにくくなっており、発掘調査によって、近世までの緩斜面の遺構面と近代以降のテラス状の造成を対比的に見ることが出来る。

地山（第1層）は灰褐色砂礫土や灰色砂礫土、黄灰褐色粘質土で形成されており、発掘区内の北端と南端では0.67mの比高差があるが、これは北半部における後世の削平のためで、本来はもう少し小さかったと考えられる。この上面を黄褐色土と黄褐灰色土で部分的に（南半部のみ）整地を行っている（第2層、中央部・北半部は削平と池のため不明）。この面で奈良時代後半～平安時代初頭までの遺構を検出した。平安時代中頃には南半部にやはり部分的であるが暗茶灰色粘質土による整地が行われている（第3層）。この面では鎌倉時代後半に至る遺構を検出した。池SG01もこの時期に掘られる。室町時代に入ると池SG01は南半を埋められ、部分的に掘り直されたが、すぐに埋められたようである。その上に茶灰褐色土で広い範囲にわたって整地が行われ、この面では室町時代後半に至る遺構を検出した（第4層）。近世の面は粘土層上に形成されたり、しっくい土間を持つものがあり、少なくとも3時期に分かれる（第5～7層）。

2 遺構と時期区分

検出した遺構は奈良時代後半から近世末にまで及んでいるが、層位との対応に留意しながらA～Dの4時期に分けた（図4）。

A期

第2層上面の遺構群で起伏のある地山（第1層）の上に、部分的に整地を行って形成されている。

SB05 南半部東北隅から理学部棟調査区

西北隅SB3159にかけて存在する東西棟3間（5.2m、推定）×3間（5.4m）の掘立柱建物で、西側2間分に（南北方向）北半1間（3.6m）だけの廂がつく。西端の梁間3間分は発掘区外で未検出であるが、桁行の柱間寸法を2.4m（8尺）とすると廂の柱列との間にちょうど1間分を収めることが出来るのでこのように復原した（図5）。廂部分の柱掘形は不整形（0.7×0.6m）で、長方形を呈する母屋

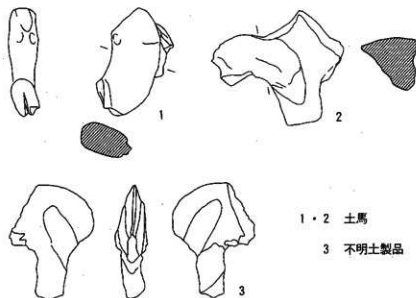


図3 包含層出土の土馬その他

の掘形との相違を見せている。廂部分の北側の柱穴は本柱が残存していた。

SB02 南半部北端中央にある東西棟3間(7.2m)×2間(3.6m)の掘立柱建物。柱間寸法は桁行が西から2.1m(7尺)、2.4m(8尺)、2.7m(9尺)と不揃いで、梁間が1.8m(6尺)等間である。残存している柱穴では南側桁行の西から2個目以外は柱痕跡が確認された。柱痕跡の径は0.15~0.3mである。柱掘形から奈良時代後半の土師器、須恵器、製塩土器が出土した。

SX02 SB02の中に収まる状態で中心より東寄りにある4基の小穴からなる構築物。東西2.1m(推定)、南北1.5mの間隔で4個の小穴が配されているが、柱根が検出されたのは西側の2基だけである。

SE09 南半部中央南寄り東壁際にある方形横板組の井戸。東側をSE08の掘形で破壊されている。遺構検出の際には気付くことが出来ず、SE08の井戸枠引上げの時に新たに発見されたため、十分な記録を残すことが出来なかった。したがって掘形の規模・構造の詳細についての正確な数値は得ていない。基本的な構造は径3m以上、深さ2.8m以上の掘形内で、約1.0m四方の範囲四隅に0.2×0.15m角の四角柱を立て、外側に各辺ごとに横板を井籠組みに積み上げているいわゆる横板組隅柱どめ(井戸)である。隅柱を支える基底の構造は解明出来なかった。井戸枠内と掘形部分を分けて掘ることも不可能であったが、遺物の出土量は多くなく、第3図1・2の須恵器のみである。

SK11 南半部中央東壁際にある隅丸長方形の土坑。東西1.25m、南北1.48mとやや南北に細長い。深さは0.29m。埋土は暗灰褐色粘質土。奈良時代後半の土師器、須恵器、製塩土器、丸瓦、平瓦が出土した。

SK34 SK11の北側に接して西側に広がるやや大きな不整形の土坑。東西3.24m、南北3.50m以上。深さは0.32m。埋土は淡茶灰褐色粘質土。奈良時代後半の土師器、須恵器、製塩土器が出土した。

SK46 南半部東北部分の壁際、SB05の廂部分南端の柱穴に切られた不整形の土坑。東西1.5m、南北1.5m。墨書を持つ須恵器杯蓋(第3図-7)が出土した。

SK35 南半部中央よりやや西北、SB02の西南隅に接して存在する不整形の土坑。東西1.90m、南北1.76mで、東南隅をSK39で破壊されており、本来は隅丸方形を呈していたようである。深さは0.13m。埋土は淡茶灰褐色粘質土。奈良時代末~平安時代初頭の土師器、須恵器、製塩土器が出土した。

SK22 中央部北端の中央やや東寄りにある不整形の土坑。坑底中央部よりやや東に偏して小穴状に深くなっており、不整形な二段掘り状を呈している。東西1.57m、南北1.84m、深さ0.15m。埋土は茶灰褐色粘質土である。平城IV期の土師器、須恵器、緑釉陶器と製塩土器が出土したが、製塩土器が破片数や種類も多く、ほぼ完形に復原出来る2個体を含めてまとまりのある資料となっている。

SD14 南半部南側の西寄りにある東西方向の溝。長さ7.7m、最大幅0.9m、深さ0.12~0.2m。一部をSB01の柱穴、中世のピット、現代の井戸SE02で破壊されている。埋土中から平城Ⅲ・Ⅳ期の土師器、須恵器、製塩土器が出土したが、時期的な主体はⅣ期であろう。

B期

平安時代中頃(10世紀前半)に南半部を中心に部分的な整地が行われ、鎌倉時代後半に至るまでの遺構が形成される。

SB01 南半部南西部分にあり、南壁外と西壁外に広がる東西棟3間以上(8.1m以上)×1間以上(4.5m以上)の掘立柱建物。柱間寸法は東西方向が2.7m(9尺)、南北方向が4.5m(15尺)と比較的

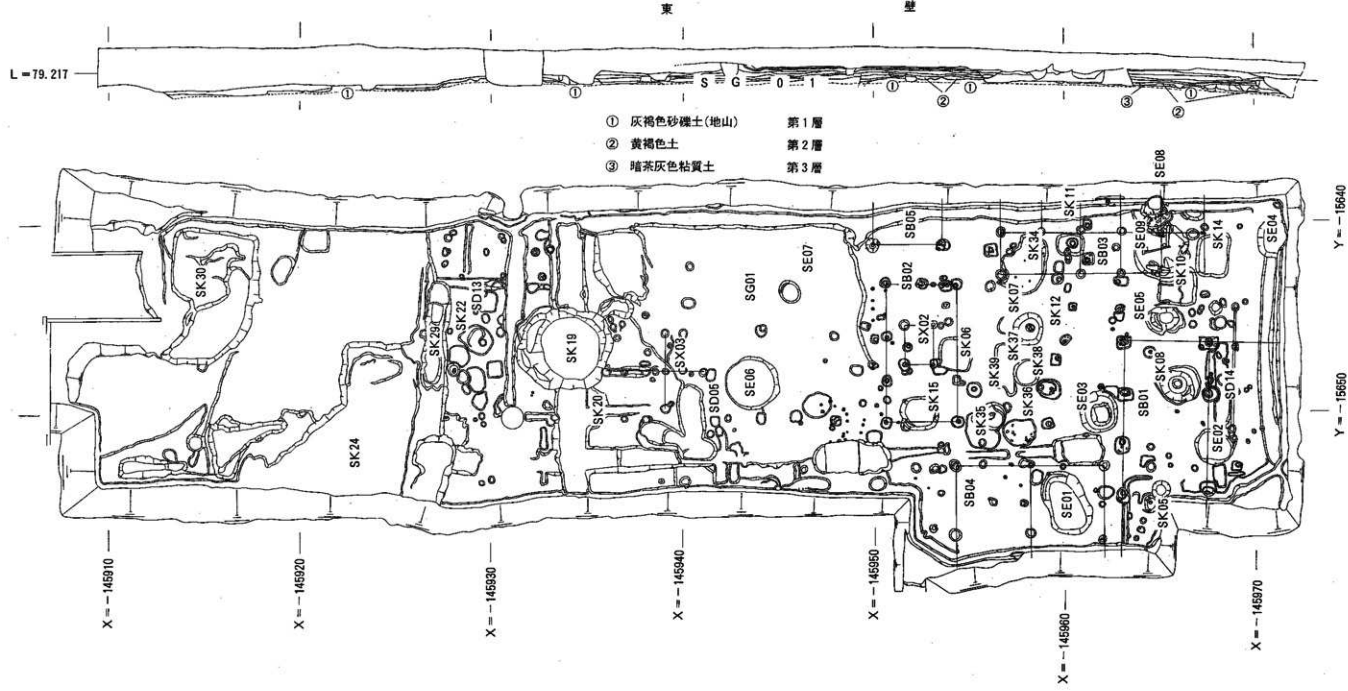
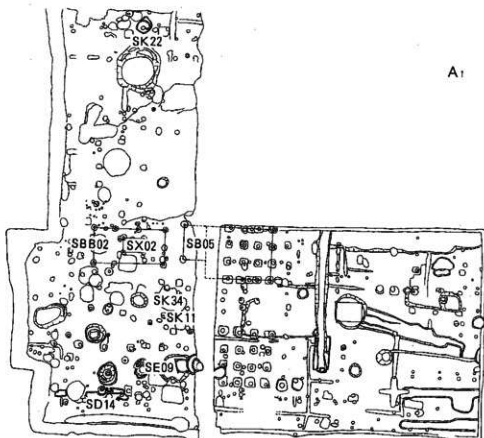
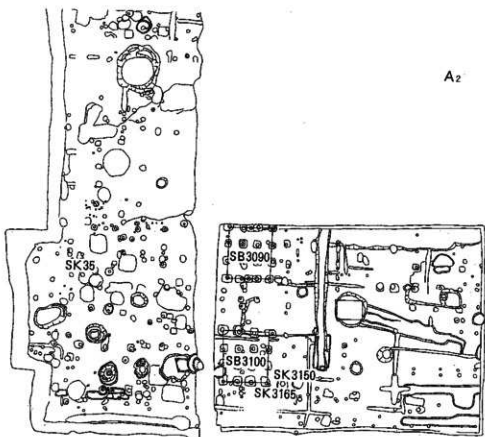


圖 4 遺構配置圖、瓦葺土層圖 (1/200)



A₁



A₂

図5 A期の変遷

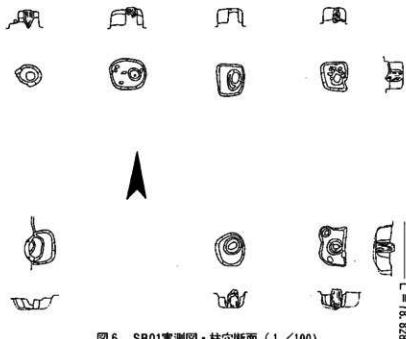


図6 SB01実測図・柱穴断面 (1/100)

規模が大きい。柱穴掘形は大きさ、形状ともに一定しているとはいえないが、 $0.7 \times 0.8\text{m}$ の隅丸方形あるいは不整形のものが多い(図版3)。柱穴の遺構面からの深さは $0.45 \sim 0.50\text{m}$ で、まれに 0.3m のものがある。木柱根は失われている柱穴もあるが、北の列東から2本目、南の列東から3・4本目以外は

残存していた(南の列3本目は現代の井戸(SE02)で柱穴自体消滅)。柱根は径 0.3m 、高さ $0.25 \sim 0.50\text{m}$ 残存しており、底部に加工のための放射状の墨線が引かれていたり、切り出した後、いかに組むための穴があけられているものがある(図6)。

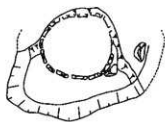
過去に本学構内でのこのような大きい木柱根の出土は昭和48年の理学部B棟新築工事の際に東側玄関口でのものがある(現在記念資料館保管)。年代や出土の状況、正確な範囲等が明らかでないので、SB01との関係を断定的に述べることは出来ないが、いずれの位置も旧十二坪内坪境小路に接する等の共通点もあり、古代における(旧)平城京二条六坊地域の性格を解明する重要な資料であると言えよう(図2)。

SB03 南半部東南寄り東壁際から発掘区外に延びる南北5間(10.7m)、東西2間以上(2.1m以上)の掘立柱建物。理学部棟調査の際のSB3161と同一建物と考えられる。すなわち全体の規模は、未発掘区に等間の南北方向柱列が存在しているとする、東西4間(8.4m)、南北5間(10.7m)の南北棟に復原出来、柱間はいずれも2.1m(7尺)等間である。掘形は円形(直径 $0.4 \sim 0.5\text{m}$ 、深さ $0.15 \sim 0.26\text{m}$)で、瓦片で柱を支えたり、掘形内に土師器土釜1個体分が埋置されていたものもある。

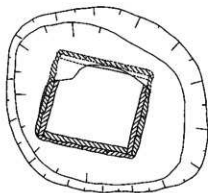
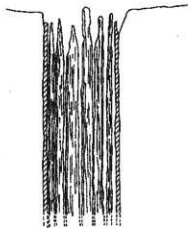
SB04 南半部中央西壁寄りから発掘区外に延びる南北2間(7.8m)、東西1間以上(3.9m以上)の掘立柱建物。建物の方向は不明で、柱間はいずれも3.9m(11尺)等間である。掘り方はいずれも直径 $0.3 \sim 0.5\text{m}$ の円形で、瓦器や土師器皿の小片が少量出土している。

SE08 南半部東壁面上南半中央にかかって検出された縦枠組の円形井戸。幅 $0.08 \sim 0.17\text{m}$ 、厚さ 0.03m の細長い板16枚を縦方向円形に並べて枠が構成されており、北側と東南側や南寄り外側を同じような細長い板各1枚で補強している。井戸枠の内径の規模は東西 0.63m 、南北 0.72m 。遺構面から井戸底までの深さは 4.30m である。枠内の上層と井戸底付近から10世紀前半の土師器、黒色土器、緑釉陶器や軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼、石帯(図18)が出土した(図7)。

SE05 SK08の東側、SE09との間にある井戸。東西 1.5m 、南北 2.2m 、深さ 0.99m 。井戸枠は残存



L = 78. 726



L = 78. 842

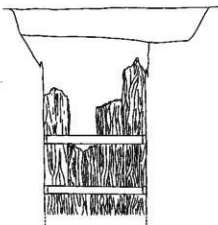


図7 SE08実測図 (1/40)

図8 SE03実測図 (1/40)

しない。掘形の規模からみて小型の井戸と考えられる。埋土中から12世紀中頃の土師器皿・土釜、瓦器碗・皿・盤が出土した。

SE03 南半部中央南西寄りにある縦板組み横棧どめ方形井戸 (図版4)。幅0.8~3.0m、長さ1.5~2.0m、厚さ0.03~0.05mの板を上下2枚以上、各辺4枚並べてこれを内側から7段以上の横棧で留めている。内法は東西1.0m、南北0.9mである。各横棧の隅角部は納穴によって接合されているが、上下に組む場合は四隅に四角い棒を立てるだけで接合を行っていない。さらに四隅の内側からの補強や縦方向の積み上げの際の部分的な補強にも規格化された小木片をあてているようであるが、具体的な組み方は明らかでない。埋土中には大量の炭や焼土を混え、中から12世紀末~13世紀初頭の土師器皿・土釜、瓦器碗・皿が出土した (図8)。

SE04 南半部東南隅の南壁面上にかかる井戸。遺構面から約0.5mまで掘り下げた。掘形は東西2.0mで、南北1.55m以上の隅丸方形である。埋土中から13世紀前半の土師器皿、瓦器碗・皿・甕が出土した。

SK08 南半部南側ほぼ中央にある楕円形の土坑。東西2.1m、南北2.5m、深さ0.78m。底部は平坦で全体に擂鉢状を呈している。埋土は茶灰褐色粘質土。12世紀中頃の瓦器碗、土師器皿・器台が出土した。

SK07 南半部中央東北寄りにある不整形な土坑。南西部分をSK12で破壊されている。残存部分の東西1.8m、南北0.9m、深さ0.12m。埋土は暗灰褐色粘質土である。12世紀後半の瓦器椀・皿、土師器皿・土釜が出土した。

SK08 南半部北半中央にある方形土坑。東西1.85m、南北1.8mの隅丸方形を呈し、深さは0.24mである。埋土は灰黒色粘質土で、木炭・焼土を混じている。埋土中から13世紀前半の土師器皿、瓦器椀・皿と若干の瓦片が出土した。

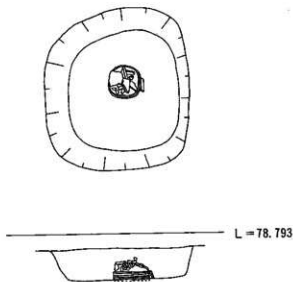


図9 SK12実測図(1/40)

色粘質土、明灰色砂質土、暗灰色粘質土、濃灰色粘土であり、暗灰色粘質土以下には、木簡・木製遊戯具・下駄・漆器椀・箸・板切れ・竹の根等が大量に含まれていた。また、土器は13世紀後半の瓦器椀・皿・盤、土師器皿・土釜・器台と国産陶器、中国製輸入磁器が出土している。

SK19は、未だ土壌分析を行っていないが、過去に土壌分析を行って回虫の卵が発見され、その結果トイレ遺構の可能性が高くなった理学部棟(新B棟)の調査の際のSE3131と坑の形状や堆積状況がよく似ており、藁木と考えられる木片や竹の根の出土もあることから、やはりトイレ遺構である可能性が高くなった。

SK19がトイレ遺構であるとする、その廃棄年代はSE3131(12世紀末～13世紀初頭)よりは一段階新しく(13世紀後半)、両者は同時存在でないが、漸移的に使用の中心が前者から後者に替わっていったとみるべきであろう。またその使用方法に関しては、この場所を直接トイレとして使用したかあるいは別の場所での使用の結果を便器(清箱)に入れて、これらの土坑まで捨てて来たかといった二つの場合が考えられる。さらに、この時点において人糞を肥料として使用することが行われていたかどうかともトイレ遺構を考える重要なポイントとなる。

SE3131は覆屋と考えられる建物遺構SB3133が存在し、埋土中から東大寺に所属するとみられる僧侶のの名の見える木簡が出土していることから、トイレ周辺の状況や使用者たちの階層をある程度は推察出来る。すなわち、周辺はSA3162(3163)・SA3165をはじめとする柵で他の空間からは隔離され、SE3131

SK12 南半部中央やや東北寄りにある不整形な隅丸方形土坑。東西1.50m、南北1.71m、深さ0.34mで、平坦な坑底に径約35cm、高さ約10cmの曲物を据え、その中に平瓦や土器の破片を無秩序に投入している(図版4)。土器は12世紀後半から13世紀初頭にかけての瓦器椀、土師器皿・土釜である。(図9)

SK19 中央部北半中央にある円形の大土坑(図版4)。東西4.32m、南北5.04m。遺構面から1.6mの深さまで掘り下げ、さらに発掘調査終了後、機械掘りで約1m弱掘り下げて底を確認した。したがって遺構面から坑底までの深さは約2.5mということになる。坑の形状は楕円状になった底からさらに円形に0.8m程度やや角度を持って掘り下げているというものである。土坑内の堆積状況は上から茶灰褐色

自体も小規模ではあるが屋根がかけられていたとすることが出来よう。

SK19は覆屋のような施設は認められないが、やはり木簡が出土しており、周辺に識字層が居住していたことが想定される。また、土器・木器を中心とする日常雑器の多さは最終的な廃棄を思わせ、次の14世紀代には居住域とトイレとの関係はそれまでと違ったものに変化していったと言えよう。

SD05 中央部中央の西壁寄り、SG01から西に延びる東西方向の溝。長さ4.0m、幅1.4mが検出されたが、西端は現代の土管埋設によって攪乱され不明である。埋土は淡茶灰褐色。瓦器・土器器皿の細片が出土している。

SG01 中央部南半の大部分を占める不整形の池。調査区内で検出された限りでは東西11.5m、南北の最大幅13.5mである。池の北岸はSK19の東南東寄りを中央部東壁との交点から南西に向ってSE06の西北まで延びていることは明らかであるが、西岸は現代の下水管埋設の掘形のため攪乱されて不明瞭となっている。しかし、SE06の西側1mの地点の池底では東壁際の池底と0.13mの比高差があり、西に向って漸次浅くなっていることや、西壁断面で池の堆積を確認出来なかったことなどから、SE06と西壁の間に南北方向の岸が存在したと考えられる。南岸はSB05の陥部分のすぐ北に接する東壁から僅かに南寄りに西にはほぼまっすぐ延びている。中央部分で不明瞭となるが、これは上層のSX01の構築やこれに関連すると見られる杭の群集による作用の結果であると推定される。池の堆積は最下層に灰色粘土、その上に灰茶褐色粘質土というのが基本的なもので、最も深いところで遺構面からの深さ0.32mである。14世紀に入って埋め立てられた池の南半では淡茶灰色砂質土で埋めたり、拳大から人頭大の隙でSX01を形成したりしている。池の北半は埋められられずに存続し、15世紀になって暗茶褐色砂質土で最終的に埋められたようである。堆積土及び埋土からの出土土器は12世紀前半～15世紀にかけての瓦器・碗・皿、土器器皿・土釜、国産陶器、中国製輸入磁器で、13世紀のものが最も多く、これらの年代幅はそのまま池の存続期間と考えて良いであろう。

SG01はその南岸の延長と考えられる遺構が理学部棟（新B棟）予定地の調査の際に検出されている。西北隅の古代の並び倉の一つSB3090の付近では不明瞭であるが、近世の溝SD3134より東側になると北壁までの幅約2mの落ち込みが東西15m以上にわたって続く。これをSG01の広がりの一部とすると、南岸の東西方向の総延長は少なくとも40m以上となり、面積は大きくて浅く、存続期間が長いという特徴を持った池とすることが出来よう。

SG01が掘削された目的は充分に明らかでないが、トイレ遺構との関連で考えるならば、もしすでに人糞を肥料として使用することが行われていたとすると、人糞と混ぜるための水の確保ということが考えられる。また、調査地が南から北への緩やかな傾斜面にあることを考えると、効率的な排水体系のうちの一つであるか、あるいは大量出水時の遊水池としての役割も想定出来よう。

理学部棟（新B棟）予定地調査の際のSE3131・SD3102の花分析によると、周囲の植生は、カキ属花粉・ソバ花粉・ウリ類の種子の産出から、畑作が近くで営まれていた可能性が高いとされている。今回の調査でも畑の位置を特定することは出来なかったが、両発掘区の成果を総合した、時期変遷を伴った景観復原がある程度可能である。

まず12世紀から13世紀初頭にかけてはSB03（SB3161）・SE03・SE3131が主要生活要素となり、ひとまとまりの居住単位を形成していたようである。SG01は12世紀のある時点で掘られたと考えられる

が、詳細な時期や12世紀中葉には埋められた池SG3099との関係は不明である。居住単位の性格はSE3131出土木簡の内容から識字層で寺院に関連した集団の日常生活の場と考えられる。付近に小規模ながら仏堂も存在した可能性もあろう。SD3093・SD3092に区画された部分等はその候補地である。付近には畑が存在し、小規模ながら食料の自給が行われたと考えられる。この居住単位は13世紀初頭頃に火災に遭い（SE3131にも多量の炭が投棄されていた）、SE03・SE3131は放棄されるが、SB3161以下の建物については明らかでない。代わってSK19が掘られSG01も存続して12世紀以来の居住単位の継続が図られたようである。SB3161の西側はこの時期以降はゴミ穴が多くなり、井戸はSE04やSE07に移っていった。14世紀に入るとSG01の南半は埋め立てられSX01が形成され、さらにSK19もこの時期までに放棄されて、居住単位や周辺の景観は大きく変化する。

中世前期の瓦器碗を主要な日常雑器として使用していた時期の当該地域の景観変遷は以上のようなものであるが、おそらくこの地域はさらに広域な一定の目的のための地域の一部分である蓋然性が高い。目的域を維持するための機能域とでも呼ぶべき部分であろう。そして生活廃棄物の自己完結的な処理システムや地形を考慮した排水体系（SG01は東に延びて、何らかの水系を通じて東側の谷地形への排水につながっていたと推定される）が継続性を意識して設置されていたことを考えると、すでに歴史学の他の分野から「都市」としての評価を得ている中世南都を考古学の分野からも同様に評価出来る手がかりを得たと言えよう。

SX03 中央部中央やや西寄り、SK19とSG01にまたがり、直交する小穴列からなる遺構。SK19に近い部分では布掘り状の溝を伴っている。南北方向は銭貨が出土したP98を交点の小穴とすると、南に1、北側に3の小穴がおおよそ1mの間隔で並び、P98のすぐ北0.5mにはさらに1小穴が存在している。東西方向はいずれもP98から2.1m（7尺）のところ各1の小穴が配されている。

このような直交する小穴列は理学部棟（新B棟）調査の際のSA3124・3125に見られる。交点の小穴は存在しないが、南北方向の列に布掘り状の溝を伴っている点が共通している。

両遺構の上部の構造を復原することはかなり困難であるが、両者に共通するもう1つの特徴は水系をつないでいる可能性があるということである。すなわち、SA3124・3125はSE3131とSG01、SX03はSG01とSK19の橋渡しの位置にあるとすることは出来よう。その機能としてはSG01で推定された機能と結びつけて考えれば、人糞と水を混ぜるために必要とされた施設か、あるいは大量出水時の効率的な排水体系の一翼を荷っていたとすることが出来よう。

C期

中央部の大部分を占めていたSG01は範囲を縮小して存続するが、すぐに埋められ、同時に広い範囲に整地が行われる。この上に主として室町時代前半から中頃にかけての遺構が形成される。

SE01 南半部西壁際中央にある井戸。掘形の平面規模は東西3.5m、南北2.1mの楕円形であるが、本来は西に偏していたようである。遺構面から1.06mまで掘り下げたが、枠の有無は確認出来なかった。14世紀前半の瓦器碗、土師器皿・ミニアチュア土釜、白色土器皿、国産陶器練鉢・甕、中国製輸入磁器碗・壺が出土した。

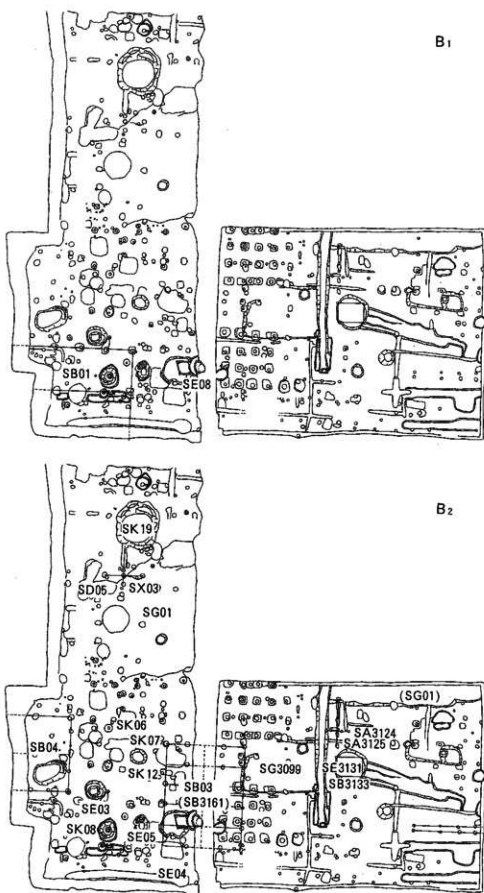


図10 B期の変遷

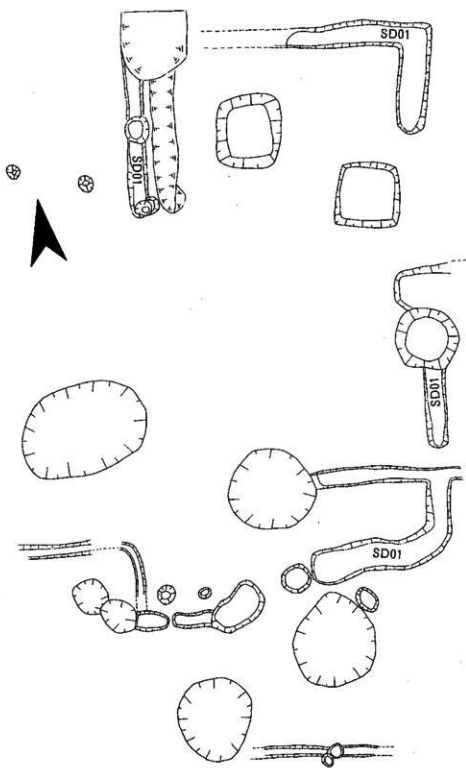


図11 SX04 (SD01) 平面図 (1/100)

る方形土坑 (図版5)。東西1.8m、南北2.1mのやや南北に細長い隅丸方形を呈する。深さは0.47m。埋土中から14世紀前半の土師器皿・土釜及び中国製白磁皿が出土した。

SK20 SK19のすぐ西に接する現状半円形の土坑。元来は円形に近い形状であったが、北半を現代の土管埋設のために攪乱され、さらに半円の真中を新しい溝が走り、円の4分の1が東西に分かれたような形状となっている。東西残存長2.0m、南北残存長1.2m、深さ0.2m。15世紀中頃の土師器皿が大量に出土した。

SE07 中央部南端東寄りのSG01中にある円形井戸。SG01がある程度埋まった段階で掘られたと考えられる。SG01底面から0.75mまで掘り下げた。東西1.2m、南北1.15mの比較的小規模な掘形である。枠の有無は確認出来なかった。埋土中より14世紀前半の土師器皿・土釜、中国製輸入磁器、木製下駄・漆器椀が出土した。

SK05 SE01の南3mのところの壁際にある円形小土坑。東西1.0m、南北0.7m、深さ0.26m。土坑内は拳大の円礫と完形の土師器皿が重なるように埋置されていた。埋土は灰褐色粘質土。14世紀前半のミニチュア瓦器椀・皿・蓋、土師器皿、陶器壺底部が出土した。

SK15 南半部北半西北寄りのSK06の西北、SB02の西辺にあ

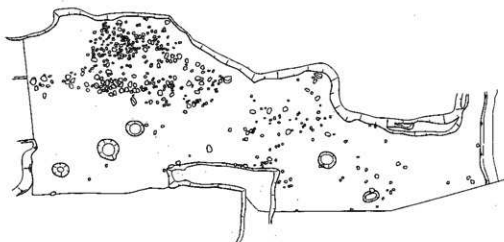


図12 SX01平面図(1/100)

SX04(SD01) 南半部中央からやや北西寄りにある溝で囲まれた長方形の区画。南北13.0m、東西6.5mの細長い部分を幅0.5~1.0m、深さ0.05~0.15mの溝(SD01)で長方形に囲っていたと推定される。遺構上面での削平が著しく、残存状態は良好でない。区画内には同時期と考えられる顕著な遺構は認められず、その性格は不明である。SD01の埋土は焼土を混じえた灰黒色粘質土で、15世紀中頃の土師器皿が出土した(図11)。

SX01 中央部南端のSG01南岸に沿って拳大から人頭大よりやや大きい石が集中的に見られたので、出土状況の記録を行った。下層に抗列の検出される箇所もあり、池の護岸施設あるいは庭園を意識した石組みの可能性も考えられる(図版5)。石を除去した際に出土した土器は14世紀前半の比較的古い時期のものが中心であった。このことと東壁土層図の検討の結果から、池SG01は14世紀に入って南岸から北に向かって幅6.5mほど埋め立てられ、その際にSX01が形成されたと考えられる。SX01の中には石が帯状に東西方向に集中している部分があり、塀の基礎とも考えられよう(図12)。

D期

SE06 中央部南半西寄りにある江戸時代の井戸。SG01が埋まった上から掘り込まれている。掘形の平面規模は東西2.8m、南北2.8mと正円に近い。SG01底面からの深さ1.04mのところまで掘り下げたが、枠の有無は確認出来なかった。埋土には灰色砂と灰黒色の泥土があり、大量の瓦を含んでいた。また出土土器の時期は近世後半を中心としたものである。

SK29 中央部と北半部の境界中央にある東西方向の溝状の土坑。東西5.7m、南北1.4m、深さ0.4m~0.9m。出土土器は江戸時代後半を中心としたものである。

SK24 北半部南端中央から西壁中央にかけて広がる大きな土坑。東西の最大長8.0m、西壁上での南北幅8.5mで、壁外に延びると考えられる。大量の近世以降の瓦や建築材を含んでおり、出土土器も近世初頭から近代にまで及んでいる。

SK30 北半部北端東寄りにある不整形の大きな土坑。東西7.0m、南北4.6mで東壁外・北壁外に延びていくと考えられる。埋土は灰色砂質土で、池あるいは整地の際に生じた溜みと推定される。遺物の出土は少なく、古代の軒丸瓦や中世の土器、近世の陶磁器が主要なものである。

Ⅲ 遺物

出土した遺物は土器と瓦が多く、木製品（木簡を含む）・石製品・金属製品（銭貨を含む）がある。時代は奈良時代から江戸時代に及んでいる。

1 土器

土器には土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・国産陶磁器・中国製輸入陶磁器がある。ここでは井戸・土坑等の遺構出土の一括遺物として、土器の概略とその意義について述べる。

SD14出土土器（第1図、図版6）土師器は杯A（1・2）のうち（1）が内面に暗文を残し、平城Ⅲ期の様相を示しているが、他は（2）の杯Aや（3・4）の皿Aに見られるように内面の暗文が消滅して底部外面のヘラケズリが顕著であることを特徴とすれば、平城Ⅳ以降の様相が強いと言えよう。須恵器は皿B（35）の法量が平城Ⅳのものに最も近く、杯A（27～29）の法量が縮小化することとも矛盾しない。（34）の杯は金属器（佐波理器）模倣のものである。（36）は脚部に透かしのある奈良時代の高杯と考えたが、古墳時代の可能性もある。

製塩土器（10～12）は奈良時代の特徴を備えているが、（10）が口縁部内外面を横方向に、体部内面下半を縦方向にヘラケズリして器壁を薄くしているのが注意される。

SK22出土土器（第2図、図版6）土師器は杯A（1～3）、皿A（4～10）ともに底部外面あるいは外面全体にヘラケズリを施した個体がほとんどである。また杯B（16・17）の法量がかなり大きいことからみても、平城Ⅳ期以降に比定されよう。須恵器では杯A（27・28）がさらに法量を縮小させているところからも同様な年代を導き出すことが出来る。（23）は軟陶系の緑釉の鉢でやはり金属器を模倣したものである。

製塩土器（18～22）は大量に出土したが、ほぼ完形に復原出来たものは（18・19）の砲弾型をした2点のみである。（21）は底部、（22）は尖り気味の丸底を持つもので、内面には細かな布目が認められる。

SE09出土土器（第3図1・2）須恵器蓋（1）は口縁端部の形態から奈良時代後半の可能性が高い。壺底部（2）は全体の形状を知ることが出来ないが、内面に自然軸が見られることから葉壺あるいは短頸壺と推定される。

SK11出土土器（第3図3～6）土師器甕B（3）は口縁端部が内面肥厚せず、口縁部も比較的短いのが特徴である。高杯（4）は杯部外面がヘラケズリのみであるが、ヘラミガキを行っていないとすると、奈良時代末以降のものである蓋然性が高い。須恵器葉壺（壺A）蓋も同時期と考えても良い。（6）の蓋の内面には赤色顔料が付着している。

SK46出土土器（第3図7・8）須恵器杯蓋（7・8）は本来同一個体であろう。外面のつまみ付近に墨書一字が見られるが、判読不可能である。

SK34出土土器（第3図9～14）土師器鉢（9）は底部外面にヘラケズリ痕跡が残存している。須恵器甕（13）は体部外面に平行タタキを残し、平底を呈すると考えられる。奈良時代後半に多く見られるが、産地の解明等は今後の課題である。甕A（14）は底部の面積が広く、口縁端部が肥厚するのが特徴である。

SK35出土土器（第3図15～22）土師器皿AⅡ（15～17）は口径15.0～16.5cm、高さ2.3～2.5cmで、調整技法は（17）のように底部外面にヘラケズリを残しているものである。これは長岡京期あるいは平安時代初頭の特徴に近いもので、皿AⅠ（19）の法量や須恵器杯身（22）の器高の高さとも矛盾しない。

SE08出土土器（第4・5図、図版7・8・9）井戸枠内の最下層出土のもの（第4図1～11）とそれより上層出土のもの（第4図12～43、第5図）に分けられる。最下層出土のものは土師器のみで、量的には少ない。杯A（1～5）・杯B（6・7）・皿A（8～10）にはいずれもe手法が顕著であるが、体部あるいは底部外面のヘラケズリが僅かに（1）や（6）に残るなど、構内遺跡SK4028に近い様相が見られる。上層のものは土師器杯A（第4図12～43、第5図1～24）で数量的にも良好な資料が得られた。こららは口径13～13.5cmのもの（第4図12～25）、14cm前後のもの（第4図26～43、第5図1）、15cm前後のもの（第5図2～14）、16cm前後のもの（第5図15～22）、20cm前後のもの（第5図23・24）がある。さらに胎土と法量の対応関係に注意すると、少なくとも2つのグループに分けることが出来る。1群は胎土に赤色クサリ礫（焼土塊）を含み、雲母片が比較的目立ち、細粒化した長石や角閃石、チャート片を含むグループで、第4図14・18・36、第5図4・5・14・19・23・24等である。色調は淡灰赤褐色あるいは淡灰褐色で器形の重みの少ないものが多い。これらの中には器壁が薄く口縁端部のナデが顕著なものと比較的器壁が厚く口縁端部にあまり強いナデを施さないものがあり、さらに細分出来る可能性がある。2群は胎土に雲母片をほとんど含まないのが特徴で、赤色クサリ礫・長石・灰色チャート等は1群よりも粒子が大きく、含まれる量も多い。第4図15・25・43、第5図8・10・12・13・20・27等で、器種・口径の相違を越えて器高が低いのが特徴である。また、全体に軟弱な焼成の個体が多い。

黒色土器（第5図34～41）は全てA類で、（34）の杯Bは外面全体にヘラケズリを残すなど古い様相を示している。

緑釉陶器壺（第5図42）は口縁部が短く口径の大きいタイプのものであろう。胎土は暗茶褐色を呈し、釉は銀化が進行している。東濃産のものであろう。

SE05出土土器（第6図1～27、図版9・10）土師器皿（1～19）は小皿（1～15）と大皿（16～19）に分けられるが、前者は口径10.0～10.5cmのものが多く、後者は口径14.5cm前後のもの（16・17）と17.0～17.5cmのもの（18・19）に分けられる。土師器土釜（20）はくの字状の口縁部で鈎が肩部上方にめぐらされ、菅原正明氏分類の大和B₁型に相当する。瓦器碗（21・22）は内底面の連結輪状暗文は丁寧であるが、両者の間では精粗が認められる。壺（27）は火鉢と考えられているもので、碗・皿以外の瓦器製品の上限を示す資料であると言える。これらの土器は瓦器碗の型式・土師器皿の様相から12世紀中葉かやや新しい時期と考えられ、構内遺跡国際交流会館予定地（北小路遺跡）のSE112出土土器と最も近いとすることが出来る。

SK07出土土器（第6図28～42）土師器皿（28～35）はやはり大皿（28～30）と小皿（31～35）とに分けられ、前者が口径15.0cm前後、後者が口径10.0～10.5cmである。土釜（37）は基本的にはSE05のものと同形態であるが、鈎の位置がやや下方に下りている。瓦器碗（38・39）は内底面の暗文が同心円状となり、外面のヘラミガキも疎らである。瓦器碗の型式から、構内遺跡SE3131・SK2892出土土器等に近く、12世紀末～13世紀初頭に比定される。

SE03出土土器（第7図1～29、図版10・11） 土師器小皿（1～7）は口径10.0cm前後、大皿（8～11）は口径14.5～15.0cmが中心的な法量である。土釜（13）の形態はSE05・SK07で見られたものと同じであるが、全体的に法量の小さい小型のものであろう。瓦器碗（22～29）はやはり内底面暗文が同心円状に退化しつつある。SK07・SE03と同様、瓦器の型式等から12世紀末～13世紀初頭に比定される。

SE04出土土器（第7図30～41） 土師器皿（30～33）は小皿（30～32）が口径9.0～9.5cm、大皿（33）の口径13.8cmと縮小化している。瓦器碗（36～40）は良好な資料がないが、（36）の復元器高が4.3cmであり、やはり縮小の傾向を示していると言える。瓦器甕（41）は構内遺跡SE2313・SK3130でも見られ、時期的にも共通していることから、当該地域におけるこの種の甕の出現時期を知ることが出来る。瓦器碗・土師器皿の型式等から13世紀後半に比定出来る。

SK19出土土器（第8図、図版11） 土師器大皿（1～6）は口径13.5cm前後のもの（1～3、5・6）と13.0cm以下のもの（4）があり、小皿（7～14）も口径9.5～10.0cmのもの（8～10、12）と9.0cm前後のもの（7・11・13）に分けられる。器台形土器（15～18）は総数6個体出土した。土釜（19・20）は菅原氏分類の大和B₁型であるが、法量に大小のあることが判る。瓦器碗（21～25）は内底面の暗文が同心円文ばかりとなり、外面の暗文も口縁部付近に僅かに見られるだけとなる。皿（26～29）も法量の縮小と内底面の暗文の簡略化が著しい。盤（30）は低い脚が三個所に付く可能性もある。SE05出土のもの（第6図27）よりも口径が大きく、法量に大小があることが予測される。東播系須恵器片口鉢（31）は口縁部の形態等から13世紀以前のもと考えられ、他の日常雑器よりも古い様相を示している。陶器播鉢（32）は形態や色調、それに体部外面を横方向にヘラケズりする調整技法からみると備前焼の特徴を備えているが、形態からする年代観と他の日常雑器の年代観とが合致せず、検討の余地を残している。中国製輸入磁器（33～40）は（33）の青白磁合子蓋以外は全て青磁で、（34）の碗・（40）の皿が同安窯系、他は龍泉窯系である。（36）は内面の施文に片切彫りと櫛描きが併用されるのが特徴で、草創期龍泉窯の竜東Ⅱ期に比定されるものであり、亀井明德氏によって12世紀中葉の焼造年代が与えられている。（38・39）はやや小型の碗で、無文で口縁が輪花状を呈するものであろう。

輸入磁器や東播系須恵器片口鉢にやや先行する時期のものが見られるが、瓦器碗・土師器皿等日常雑器の示す年代はSE04とほぼ同じくらいで、13世紀後半に比定される。

SE01出土土器（第9図1～13） 土師器皿のうち（1～3）は通常のもので大皿の口径12.9cm、小皿は9.5～10.0cmと構内遺跡国際交流会館予定地（北小路遺跡）SK421の土師器皿に近い様相を持っている。（4）は扁平な高台が作り出されていて、底部外面に糸切り痕跡の見られる特異な皿である。胎土・焼成・色調からは古代末～中世前期の大和でも散見される白色土器に似ているが、同時期のものの類例は知られていない。（5）の大型皿は器高が高く、特異な形態のものである。ミニチュア土釜（6）は外面にスガが付着している。東播系須恵器片口鉢（7）は色調が灰黒色を呈し、口縁端部の肥厚も著しいことから13世紀末に位置付けられるものであろう。中国製輸入磁器で白磁（8～10）のうち（8）の白磁壺底部外面（高台内）には墨書が認められるが、判読出来ない。青磁（11）は大宰府龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6-bに属し、やや小型の碗である。瓦器碗（12）は復原口径12.2cm、復原高6.5cm以上で口径に対する器高の指数が高いのが特徴である。13世紀後半までの瓦器碗とは形態的に異なる可能性がある。常滑焼甕（13）は12世紀後半のものである。

上述の構内遺跡SK421の土師器皿との共通性や瓦器碗がほとんど見られないことから14世紀前半に位置付けられよう。

SE07出土土器（第9図 14～44、図版12） 土師器大皿（14～28）は口径11.0cm前後のもの（14～21）と11.5～12.0cmのもの（22～27）に分けることが出来る。小皿（29～35）も口径8.0～8.5cmのもの（29～31）と8.5～9.0cmのもの（32～34）に分けられる。ミアチュア土釜（36・37）は（36）がススの付着が全くなく、（37）は外面鈎部以下にススの付着が顕著に認められる。また口縁端部を僅かであるが外側に折り曲げて作り出している。土釜（38～40）は口縁端部が内彎するタイプで、（38・40）が菅原氏分類の大和H₁型、（39）がH₂型である。中国製輸入磁器（41～44）は青磁碗（41・42）が大宰府龍泉窯系青磁碗I-5-b、白磁皿（43）は口縁端部の釉をカキ取ったいわゆる口禿の白磁である（大宰府白磁皿分類IX-1-c）。（44）は白磁碗の底部である。

土師器大皿・小皿ともSE01のものに比して法量縮小の傾向が見られることから、14世紀前半でも比較的新しい時期に比定出来る。

SK15出土土器（第10図 1～21） 土師器大皿（1～7）は口径12.5～13.0cmのものが主であるが、（6・7）のように12.0cm未満のものもある。口縁部の成形・調整の際、全体を強くナデることによって口径の縮小を生じたのであろう。小皿（8～14）は口径10.5cm前後のもの（8・9）と9.5～10.0cmのもの（10・11・13）に分けられる。瓦器碗（16・17）はミアチュア製品の系譜を引くものである。瓦器蓋（20）は口縁部外面にやや粗いヘラミガキ（暗文）が施され、天上部外面では離れ砂痕跡の上からヘラミガキが施されている。陶器壺（21）はSX01出土のもの（第10図 48）と接合した。信楽焼であろう。

土師器皿の法量からはSE01出土のものに最も近く、通常の瓦器碗が見られないことも考えると、14世紀前半に比定出来るが、口縁部全体を強くナデる大皿（7）が出現していることは注意される。

SK05出土土器（第10図 22～38） 土師器皿（22～35）は赤褐色を呈するもの（22～33）以外に灰白色を呈するもの（34・35）もすでに出現しており、前者のうち大皿（22～30）は口径10.5～11.0cmのものが主であり、器壁が厚く二段のナデを口縁部外面の広い範囲に施すもの（23・24）、器壁が比較的薄く、口縁部外面のナデの範囲も比較的狭いもの（22・25～30）とがある。小皿（31～33）は口径8.5cm前後で、底部を押し上げたいわゆるへそ皿タイプのものである。後者は小皿（34・35）のみで、口径7.0cm前後と、赤褐色系のものよりもひとまわり法量が小さい。土釜（36・37）は（36）が菅原氏分類の大和H₁型、（37）が大和H₂型で内面には比較的粗いハケメが部分的に認められる。中国製輸入磁器白磁皿（38）は口縁端部の釉をカキ取った大宰府白磁皿分類IX-1-cに属するものである。

土師器皿の法量はSE07出土のものに近く、僅かに灰白色系土師器皿を含んでいて、構内遺跡国際交流会館予定地（北小路遺跡）SD431には先行すると考えられるところから、実年代は14世紀中葉に比定出来る。

SX01出土土器（第10図 39～51） 土師器皿は大皿（39・40）が口径12.3cmと11.3cm、小皿（41・42）が口径8.5cmと9.5cmとSE01やSE07に近い様相を持つ。土釜（43～45）はいずれも法量が小さいタイプのものである。（44）は口縁端部を外側に折り曲げて成形されている。（45）はSE07出土のもの（第9図 37）と形態は似ているが、口縁端部を僅かに外に折り曲げて成形せず、内外面に強いナデを行っているだけである。瓦器碗（46）は口径に比して器高の指数が高い特異な形態のものであろう。土

釜(47)は瓦質で、大和以外の地域、菅原氏分類の摂津E型の可能性がある。陶器壺(48)は信楽焼と考えられ、SK15出土のもの(第10図21)と同一個体である。中国製輸入磁器は青磁碗(49~51)のみが図化出来、(49・50)は大宰府龍泉窯系青磁碗I類、(51)は同龍泉窯系青磁碗I-5-bである。

土師器皿の法量や特異な形態の瓦器碗(46)の存在からSE01と近いことや、やはり土師器皿の法量で共通性があり、信楽焼壺(底部のみ)が相互に接合したSK15とも時代的共通性があることを併せ考えると、14世紀前半でも早い時期に比定出来る。

SG01出土土器(第11・12図、図版12・13)

第11図は瓦器碗(1~7)・瓦器皿(8・9)・土師器皿(10~29)・土師器小碗(30)・土師器ミニアチュア土釜(31)・土師器把手付鉢(32)・土師器土釜(33~37)である。

瓦器碗(1~7)のうち(1・2)は内底面の暗文が連結輪状・ジグザグ状であり、外面の暗文の状態等からも12世紀前半に位置付けられる。(2)の高台内側に托の痕跡を残している。(3・4)は内底面の暗文がやや疎らな連結輪状で12世紀中葉、(5~7)は内底面が同心円状の暗文で12世紀後半のものである。(3・4)はSE05の瓦器碗と共通性があり、(1・2)の存在を考えるとSG01の時代の上限は12世紀中葉かあるいはややさかのぼると考えることが出来よう。土師器皿(10~29)も大皿の口径が13.5~14.0cmのもの(10~14)と14.5~15.0cmのもの(15~17)に、小皿の口径が9.0~9.5cmのもの(21・22・25・29)、10.0~10.5cmのもの(18~20, 23・24・26・28)に分けられ、大皿の方は瓦器碗の時期差に対応しているようであり、小皿は形態からみて瓦器碗の時期よりも新しいものを含んでいる可能性がある。小碗(30)は底部外面に墨書が認められるが、判読は出来ない。ミニアチュア土釜(31)は形態的にはSX01やSE01出土のものに近いが、法量が各々異なる。外面にススは付着していない。(32)は器壁の厚い特異な形態の鉢である。外面の一部に口縁部にかけて黒色物質の付着が認められるが、性格は不明である。土釜(33~37)は(33~35)が菅原氏分類の大和B型、(36・37)は法量の小さいもので、菅原氏分類の大和H₂型の範疇に入るであろう。いずれも13世紀のものと考えられる。

第12図は国産陶器(1~3)、中国製輸入磁器(4~14)、瓦器碗(15)、土師器皿(16~24)、土師器土釜(25~27)、国産陶器(28~31)、中国製輸入磁器(32・33)である。(1~14)は第11図の土器と時代的に近いものであり、(15~33)はSX01と共通するか、それより新しい時期のものである。

東播系須恵器片口鉢(1)は13世紀の、灰釉系陶器片口鉢(2)は12世紀末以前のものであろう。常滑焼壺(3)もSE01出土のもの(第9図13)同様、12世紀後半頃の特徴を有している。中国製輸入磁器は青磁(4~7)と白磁(8~14)がある。(4・7)は大宰府龍泉窯系青磁碗I-5-b、(5)は口径が比較的大きく、器高の低い碗であるが、外面の片切り彫りの沈線や内面の細かなクシ状工具による施文等、龍泉窯系青磁の中でも古い段階のものである可能性がある。(6)は荷花文の一部が残存しており、大宰府龍泉窯系青磁碗I-2-aである。(8)は口縁部が輪花状を呈する白磁碗で器壁が薄い。(9)は大宰府白磁碗分類V-3、(10)はV-4-b、(11~13)はIV-1、(14)は大宰府白磁皿分類VI-1である。

瓦器碗(15)は口縁部外面に僅かに暗文を残しているが、内面の暗文は疎らで、高台も低く貼付けられて用をなしていない。大量生産されなくなった時期のものであろう。土師器皿(16~24)のうち(17)は色調が灰白褐色を呈するいわゆる白土器である。(16)は法量・内外面一段ナデの製作技法等、

(17)に近似しているが、やや大きな赤色クサリ礫・白色砂粒を含むいわゆる赤土器である。他の赤褐色系の土師器皿(18~24)は法量や底部を押し上げる製作技法の存在から、14世紀に比定されるものであろう。土釜(25~27)のうち(25)は菅原氏文類の大和I₂型、(26)は同じくH₂型、(27)はH₁型である。東播系須恵器碗(28)は口縁端部の形態から12世紀後半のものであろう。同片口鉢(29)はSE01出土のもの(第9図7)より口縁端部の肥厚が著しく、14世紀のものと考えられる。(30)は瀬戸の底御目皿、(31)は口の開いた形態の小壺の底部であらう。中国製白磁皿(32・33)は大宰府白磁皿分類IX-1あるいはIX-2に属するものである。

SD01出土土器(第13図1~15) 土師器皿(1~13)は灰白色を呈するいわゆる白土器(1~11)と赤褐色を呈するいわゆる赤土器(12・13)に分けられ、数量的には前者の方が多く、法量も多様である。灰白色系土師器皿は口径7~8cmのもの(1~3)、10cm前後のもの(4~6)、13~14cmのもの(7・8)、17cm前後のもの(9~11)に分けられる。赤褐色系土師器皿は(12)が口径9.0cm、(13)が口径9.8cmと法量の小さいものしか存在しない。(13)の口縁部にはススが付着している。土釜(14)は菅原氏分類の大和H₂型で14世紀以降のものである。中国製青磁碗(15)は大宰府龍泉窯系青磁碗I-5-bに属する。釉色や法量等からやや時期の下のものであろう。

SK20出土土器(第13図16~39) 土師器皿(16~38)はほとんどが灰白色系で少量の赤褐色系が存在するが、図化出来るものはない。灰白色系土師器皿の口径は、7cm前後のもの(16・17)、10cm前後のもの(18~26)、13cm前後のもの(27~36)、17cm前後のもの(37・38)といったように規格化が進行している。いっぽうで強いナデによって高台を作り出したような形態のもの(25)や深い碗状のもの(33・34・36)等多様性も認められる。中国製白磁碗(39)は底部のみの残存で、外面は高台内まで露胎。内面は施軸されていて、内底面に目積み痕跡が残る。やや小型の碗であらう。

SK20のように灰白色系土師器皿(白土器)を大量に埋めた土坑は理学部棟(新B棟)調査の際にBE83区でも検出された(以下BE83区土坑とする)。土師器皿の様相はSK20同様ほとんどが灰白色系で、赤褐色系は破片を含めても数点であった。(図13)はBE83区土坑出土灰白色系土師器皿であるが、やはり口径7cm前後(1~3)、10cm前後(4~6)、13cm前後(7~9)、17cm前後(10)に分けられ、法量の

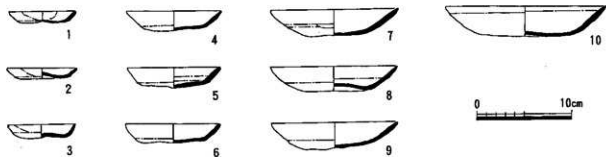


図13 BE83区土坑出土土器

規格化が進んでいると言って良い。

SE06出土土器（第13図 40～42） 陶器鍋（40）は内外面に貫入の多い暗緑色の釉が施され底部外面は露胎である。伊賀・信楽系の18世紀後半～幕末の陶器である。伊万里染付碗（41）はいわゆるくらわんか手と呼ばれるもので、18世紀前半を中心に大量生産されたものである。伊万里染付小杯（42）は外面の高台周辺に蓮弁を細かい線で描く。18世紀後半～幕末のものであろう。

2 瓦・塼（第14図、図版14）

瓦は軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦が出土しており、時代は古代から近世に及んでいる。中世前期までの軒瓦を（第14図）に掲載したが、調査面積に比して出土点数は少ない。

八弁複弁蓮華文軒丸瓦（1） 中房が凹み、なかに1+6の蓮子を持つ6311-Baである。瓦当裏面に縦方向の粗雑なヘラケズリが見られる。胎土にはやや大きな白色砂粒が目立つ。焼成は普通で暗灰白色を呈する。

八弁複弁蓮華文軒丸瓦（2） 中房蓮子は1+6であるが、中央の1つが大きく凸出する6282-Baである。胎土に赤色クサリ塵・白色砂粒を多く含む。焼成は軟らかく、淡灰褐色を呈する。

（3）は外区の珠文の配置、蓮弁と中房の断面の状態から見て6235型式の磨耗した范を使用して製作した八弁複弁蓮華文軒丸瓦と考えられる。胎土には黒色斑、黒色砂粒・白色砂粒を多く含む。焼成は軟らかく、淡灰褐色を呈する。

均正唐草文軒平瓦（4） 中心飾りと右側の2単位分の唐草文しか残存していない。6664のうちの1型式である。胎土にやや大きな白色砂粒を多く含む。焼成は普通で暗灰青色を呈する。

均正唐草文軒平瓦（5） いわゆる興福寺式軒平瓦の左側の唐草文の一部分だけが残存している。内区部分に比して外区・脇区の凸出が顕著である。上外区の珠文が楕円形を呈していることから6671-Cであろう。顎は段を成さず直線顎である。細かい白色砂粒や黒色斑を含む。焼成はやや軟弱で暗灰青色を呈する。

均正唐草文軒平瓦（6） 同じく興福寺式軒平瓦であるが、外区・脇区の凸出がそれほど顕著でないのと上外区と脇区の珠文の形状の相違が明瞭なことから6671-Bであろう。顎は明瞭な段を持つ。凹面瓦当部寄りに横方向のヘラケズリが施されている。顎部には僅かに縄目叩きの痕跡が認められる。胎土にはやや大きな灰色砂粒・黒色砂粒が含まれており、焼成はやや軟弱で、灰白色を呈する。顎部全面に赤色顔料の付着が認められる。

重郭文軒平瓦（7・8） 二重郭の6572型式である。いずれも明瞭な段顎を有している。（7）は凹面瓦当部寄りに横方向のヘラケズリが施されており、顎部には縦方向の縄目叩き痕跡が認められる。胎土には灰色砂粒・白色砂粒を含み、焼成は普通で、灰色を呈する。（8）はやはり凹面瓦当寄りに横方向のヘラケズリが施されている。胎土にはやや大きな白色砂粒や赤色クサリ塵若干を含み、焼成は軟らかく、黒灰色を呈する。

均正唐草文軒平瓦（9） 左側3単位のみ残存。やや小型で左端の唐草文の形状から6685-Aと考えられる。顎は明瞭な段を作らず、顎部側の周縁直下に僅かに稜を作り出しているだけである。凹面は横方向のナデで丁寧な調整し、凸面は平瓦部横方向の縄叩きの上から縦方向の丁寧なナデで調整し、さら

に瓦当面寄りを横方向のナデで仕上げている。胎土には白色砂粒・黒紫色斑をやや多く含み、焼成は堅緻で、暗灰青色を呈する。

均正唐草文軒平瓦(10) 左側5単位のみ残存。6721のうち1型式である。顎部には明瞭な段がなく、顎部側周縁直下を幅1cm強程度横方向にヘラケズリを行って稜を作り出している。凹面は瓦当面寄りを横方向にヘラケズリし、凸面は顎部から平瓦部にかけて縦方向のヘラケズリを行っている。胎土に白色砂粒・黒色砂粒・黒色斑を含み、焼成は普通で、暗灰白褐色を呈する。

蓮華文軒丸瓦(11) 蓮弁と蕊の一部のみ残存。全体の文様構成は復原し難い。丸瓦の挿入位置は低く、接合粘土は多くない。また、接合に際して丸瓦先端に傷をつけたりしていない。胎土に白色砂粒・黒紫色斑を含み、焼成は堅緻で、暗青灰色を呈する。

巴文軒丸瓦(12) 内区は中央の珠文を中心に左巻きの三ツ巴が主文で、外区にやや細かな珠文をめぐらす。瓦当裏面の接合部付近と周縁の外側には指ナデの痕跡が認められる。

巴文軒丸瓦(13) 内区主文は左巻きの比較的量感のある三ツ巴で、外区は珠文が密に配されている。丸瓦挿入位置は低く、瓦当裏面は不定方向のヘラケズリによって調整されている。

均正唐草文軒平瓦(14) 花菱文を中心飾りとし、唐草と花文の組み合わせを左右に2回ずつ反転させた文様構成である。凹面は瓦当部上面にまで布目が残り、周縁に接した部分だけ、幅0.5cmにわたってヘラケズリで調整が行われている。

均正唐草文軒平瓦(15) 双脚状の蕨手がついた花文を中心飾りに、左右に花文と唐草を反転させる文様構成である。凹面には布の折り返しと端部の痕跡が見られる。

唐草文軒平瓦(16) 右から左に流れる唐草文の3単位分だけ残存。凹面は瓦当上面を横方向にヘラケズリしている。

均正唐草文軒平瓦(17) 左から右に流れる唐草文の一部しか残存していない。中心飾りは平面卵形で環状を呈すると考えられる。周縁の幅が広いのが特徴的である。SX01出土。

均正唐草文軒平瓦(18) 中心飾りと左側4回反転の唐草文が残存。主文部分の幅が1.4cmと狭い。瓦当面から凹面にかけてススが付着している。SE01出土。

埴(図14・15)はSE08から最も多く出土し、その他は土坑や柱穴から若干の出土がある。いずれも長方形無文埴で、法量によって3種類に分けられる。ここではSE08出土のものを図示する。これらのうち縦の長さが判るものは(図14-1)だけであるが(26.4cm)、(図14、図15-1)は横の長さ13.6~14.0cm、厚さ5.6~6.0cmの範囲に収まり、同じ規格を意識して製作されたと考えられる。(図15-2)は厚さ5.5cmとあまり変わらないが、横の長さが11.6cmと明らかに法量の相違が認められる。(図15-3)は縦・横の長さともに不明であるが、厚さが6.7cmと他と大きく異なり、胎土・焼成も違うことから、別に分類した。表・裏・側面には縦方向のハケメが認められ、端面には押し込んだような粘土の接合痕跡が残っているが、型に押し込んで製作されたと明らかに判る痕跡はない。(図14-1~3、図15-1・2)は表面が淡灰褐色を呈し、軟弱な焼成で、(図15-3)は灰白褐色を呈し、やはり焼成は軟弱である。

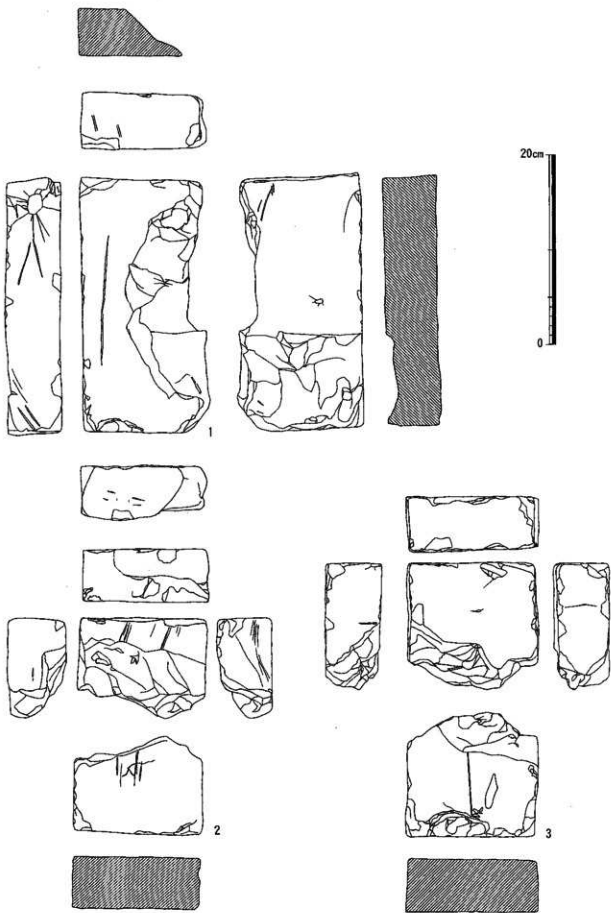


图14 SE08出土陶 (1)

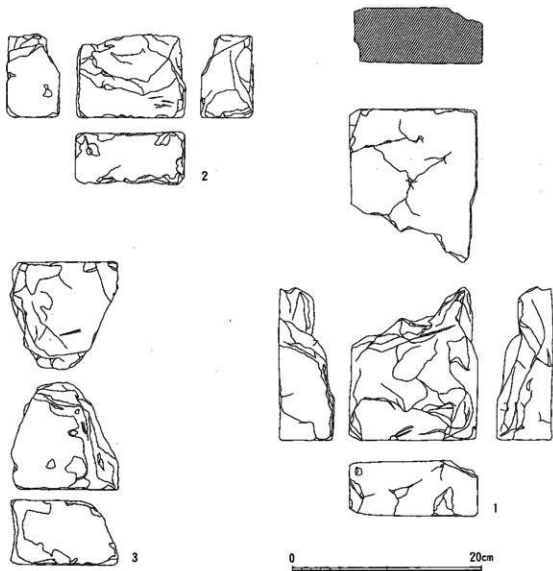


図15 SE08出土埴 (2)

3 木製品・石製品・金属製品

木筒 (図16) SK19出土。残存長13.0cm、残存幅3.0cm、厚さ1.5mmの薄板断片に二行にわたって墨書が見られる。各々の偏・旁・漢字・片仮名・平仮名の区別も明らかでない。

「□□□□□□□□

□□□□□□□□

SK19がトイレ遺構である可能性が高いことから、藩木として再利用されたものであることも考えられる。

漆器椀 (図17) 中世漆器椀はSK19・SG01・SK15・SE07から出土している。

SK19出土椀 (図17-1) は口縁部が欠損しているため口径・器高は不明であるが、高台径5.0cm、高台高0.1cmで、体部の厚さ0.2~0.4cm、底部の厚さ0.1cm強である。断面四角形で小型の輪高台を削り出し、



図16 SK19出土
木簡 (1/2)

や丸みを帯びて立ち上がり、腰のあたりから直線的に口縁までつながるものと思われる。内面には、全面に塗られた黒色の漆の上に口縁部に1cm以上の幅で赤色の漆が塗られている。外面には、高台内も含めて全面に黒色の漆が塗られており、口縁部付近に赤色の漆で何らかの文様が施されていたが、現状ではその意匠は不明である。

SG01出土碗(図17-2)も口径・器高は不明で、高台径8.0cm、高台高0.6cm、体部の厚さ0.3~0.7cm、底部の厚さ0.5~0.7cmである。高台部は外周から0.5cmのところを沈線が走り、そこよりも内側はチョウナ等の工具で削ってある。高台は明確な輪高台は削り出さない総高台である。体部は高台部からなだらかに立ち上がる。高台内・底部外面を除く全面に黒色の漆が塗られ、残存部分には赤色の漆による文様は施されていない。木地について言えば、内面にロクロ目が特に明瞭に観察される点と、高台部と体部との境界の厚みが0.3cmと他の部分よりも際立って薄い点、等から全体に荒いつくりである印象を受ける。

SK15出土碗(図17-3)は小破片のみである。この破片には黒色の漆の上に赤色の漆による文様が施されている。意匠名は不明であるが、半円状の文様を二つ向い合わせて一単位として施し、円形の文様になっている。文様の輪郭線に漆がたまっている点から、この文様は筆以外の工具が用いられたスタンプ文(印判施文)であることが判る。

SE07出土碗(図17-4)は口縁部が欠損しているが、高台径6.8cm、高台高0.4cm、体部の厚さ0.2~0.9cm、底部の厚さ0.8cmである。高台は明確な輪高台を削り出し、体部の厚さは底部から口縁部に向かって急激に薄くなる。内面は黒色の漆の上に、見込み部分に赤色の漆で菊の花の文様が施されている。この文様は、筆で菊の花の外形が塗りつぶされた後、中心部の円と花卉と花卉の境界が、針のようは工具で漆がかき取られて表現されている。このように漆をかき取ることによって線をあらわす技法はかき取り技法と呼ばれ、蒔絵にも見られる。なお、この資料の菊花文では、かき取られた漆が花卉の外周部に溜まっていることから、各線とも中心か外へという方向でかき取られたことが判る。外面の体部には黒色の漆の上に赤色の漆で描かれた花卉の端部が残っており、菊花の文様があったようである。高台内にも黒色の漆が塗られている。

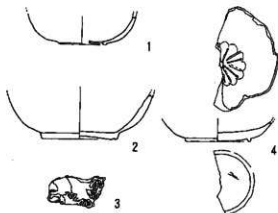


図17 漆器碗 (1/4)

以上4点の漆器の年代は、まず高台形態に注目すると、総高台と輪高台が見られた。総高台の碗は今のところ全国的に見て輪高台碗より先に現れて先に消える。SG01出土の碗も12世紀末から13世紀前半に収まるものと思われる。SK19出土の輪高台碗は高台をしっかりと削り出している点から13世紀前半以降の年代が想定出来る。SE07出土の輪高台碗は、器壁が薄くまた高台をしっかりと削り出している点から13世紀後半以降の年代が想定出来る。漆塗の技法に着目すると、スタンプ施文は13世紀

中頃から14世紀中頃まで碗皿に多用された技法で、SK15出土の碗片もこの時代に収まるであろう。

(本吉 恵理子)

石帯 (図18) SE08

出土。巡方1点。透し孔の半分より以下、全体の4分の1程度を欠失している。黒色の光沢のある石材が使用されている。横の長さ3.4cm、厚さ0.7cmで縦方向の長さが不明であるが、山口県見島出土例(3.57×3.26×0.59cm)をもとに復原すると、3.6cm前後であろう。

石綱 (図19) (1)はSG01、(2)はSK19出土である。復原径は(1)が31.8cm、(2)が25.85cm。いずれも外面にはスガが付着しており、二次的な使用による擦痕も認められる。

温石 (図20) SG01出土。残存長10.1cm、幅6.2cm、厚さ0.6~0.8cm。濃緑と黄緑の斑文のある片岩質の軟らかい石材を使用している。孔は見られない。一部分に有機質の付着した痕跡がある。

銭貨 (図21) SK19の南側、SG01との間のSX03を構成する小穴の1つから出土した。径約2.4cmの円体の中

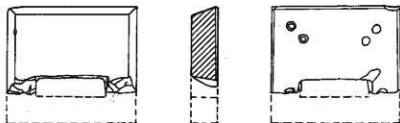


図18 石帯 (1/1)

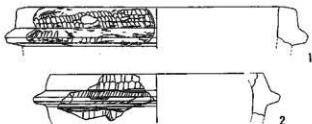


図19 石綱 (1/4)

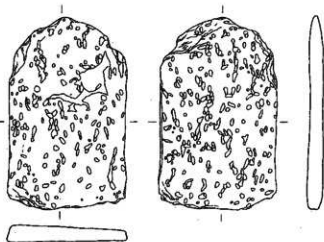


図20 温石 (1/2)

央に0.7×0.65cmの方孔がある。銭文は腐蝕が進んでいるため明らかでないが、「口通(の)元口」と判読される。反対側の面にも記号状の文様があるが、やはり腐蝕のため明らかでない。

鉄釜 SK22の東側にある南北溝SD13出土。瓦器・土師器を伴っている。口縁部と鋳部の一部分で錆蝕が著しい。



図21 銭貨 (1/1)

あとがき

現在の理学部校舎G棟建設に先だって発掘調査を実施した。その調査結果がまとまり、報告書刊行の運びとなった。発掘調査は、掘削を伴う現場の調査だけでなく、その後の遺物整理、現場で作成の図面整理などが伴うものであり、報告書の刊行で一段落する。発見した建物跡の一つ一つの分析と記述、また出土した土器片・瓦片・その他の遺物についても一つ一つ実測図を作成し、分析と記述を行う。丁寧で根気のいる作業が続くのである。発掘調査は1993年であるから今日まで6年ほど経過しているが、この間の関係者の日々の努力に敬意を払うものである。

奈良女子大学は、奈良時代の平城京外京に位置するだけでなく、江戸時代の奈良町奉行所にあたり、その間の平安時代や中世などの新旧の建物跡が重複している。各時代の様々な遺物も出土している。今回の報告書が、今後のこの地域の歴史的背景の解明に役立てば幸いである。

1999年1月

埋蔵文化財発掘調査会委員長
生活環境学部教授

上野 邦一

表1 SD14

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
1-1	土師器杯A	(20.8)	(4.2)		赤色砂粒を多く含む。	良好	淡赤茶色	口縁部ナデ、底部外面ヘラケズリ、底部内面暗文。
1-2	土師器杯A	(19.2)	不明		白・灰色砂粒を含む。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。
1-3	土師器皿A	(16.2)	2.2		白色砂粒を含む。	良好	淡褐色 一部淡黄褐色	口縁部内外面ナデ、底部外面ヘラケズリ。
1-4	土師器皿A	(19.4)	22.0		細かい気泡・砂粒を含む。	良好	赤褐色	口縁部外面ナデ、底部外面ヘラケズリ。
1-5	土師器高杯A	(30.8)	不明		0.3~2.0mmの砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	口縁部ナデ。
1-6	土師器盤	(28.4)	不明		良好。	良好	黄褐色	口縁部・体部ナデ。
1-7	土師器碗C	13.5	4.8		少し粗い砂粒を含む。	良好	赤褐色	口縁部ナデ、外面はく落有り。
1-8	土師器蓋B	(16.3)	不明		少し粗い砂粒を含む。	良好	赤褐色	口縁部ナデ、体部外面接合痕。
1-9	土師器蓋A	(15.0)	12.4		白・黒・透明砂粒を含む。	良好	淡赤褐色 内部：灰色	口縁部ナデ、底部外面スス付着。
1-10	製塩土器	(9.8)	不明		細かい長石・灰色チャート・やや大きい赤色クサリ礫を多く含む。	良好	淡灰褐色と 淡赤褐色	内外面に細かいケズリ有り。
1-11	製塩土器	(11.0)	不明		白・灰色砂粒と赤色クサリ礫を少し含む。	精緻	暗赤褐色	内面ナデ、口縁部外面ワラジ痕。
1-12	製塩土器	(10.8)	不明		長石粒と灰色チャート細片・赤色クサリ礫を含む。	良好	明赤褐色	口縁部内面指頭痕。
1-13	須恵器壺	(21.6)	不明		白い砂粒を含む。	良好	黒灰色	外面ナデ、内面に自然釉。
1-14	須恵器壺	(27.9)	不明		細かい砂粒を含む。	良好	灰色 内部：白褐色	内外面ナデ。
1-15	須恵器皿A	(15.1)	1.8		黒褐色の砂粒を含む。	良好	白灰色	内外面ナデ。
1-16	須恵器皿A	(16.4)	1.6		黒褐色の砂粒を含む。	良好	白灰色	内外面ナデ。
1-17	須恵器皿A	(16.2)	1.5		黒色砂粒を含む。	良好	白灰色	外面と口縁部内面ナデ。
1-18	須恵器蓋	(16.1)	4.6		白色砂粒を含む。	良好	灰色	口縁部内面ナデ。
1-19	須恵器蓋	不明	(1.4)		黒色砂粒を含む。	良好	黒灰色	断面に黒色の層有り。
1-20	須恵器蓋	不明	(2.0)		黒色砂粒を含む。	良好	灰白色	
1-21	須恵器蓋	(13.0)	不明		白色砂粒を少し含む。	良好	灰色	内外面ナデ。
1-22	須恵器蓋	(11.6)	不明		白色砂粒を少し含む。	良好	黒灰色	ナデ不鮮明。
1-23	須恵器蓋	(17.0)	不明		黒色砂粒を含む。	良好	黒灰色	
1-24	須恵器蓋	(26.1)	不明		細かい黒色砂粒を含む。	良好	白褐色	内外面ナデ。
1-25	須恵器蓋	(25.4)	不明		細かい黒色砂粒を含む。	良好	白灰色	天井部ナデ。
1-26	須恵器杯A	(8.6)	4.3		底部に小石混入。	良好	黒灰色	内外面ナデ。底部ヘラ切りか？
1-27	須恵器杯A	13.9	3.6		黒色砂粒を少し含む。	良好	灰白色	内外面ナデ、底部ヘラ切り痕。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
1-28	須恵器杯 A	(14.2)	4.6		黒色砂粒を少し含む。	良好	灰褐色	底部内面ナデ、他は不鮮明。
1-29	須恵器杯 A	(14.4)	3.6		大きめの砂粒を含む。	良好	灰褐色	口縁部ナデ。
1-30	須恵器杯 B	(9.0)	3.6	6.5	砂粒をほとんど含まない。	良好	灰色	内外面ナデ。
1-31	須恵器杯 B	10.4	3.9	7.5	黒色砂粒を少し含む。	良好	灰色	底部外面以外ナデ。底部ヘラ切りか？
1-32	須恵器杯 B	(13.4)	3.5		黒色砂粒を少し含む。	良好	灰色	内外面ナデ。
1-33	須恵器杯 B	13.3	3.4	8.9	黒色砂粒を少し含む。	良好	灰色	底部外面以外ナデ、底部ヘラ切り感。
1-34	須恵器杯 B	(15.8)	6.2	8.0	黒色砂粒を少し含む。	良好	白灰色	外面上半ナデ、外面下半ケズリ。
1-35	須恵器皿 B	(31.4)	5.9		砂粒を少し含む。	良好	灰白色	内外面ナデ。
1-36	須恵器高杯	不明	不明	(13.8)	細かい黒色砂粒を含む。	良好	白褐色	内外面ナデ、側面120°毎に計3つの窓有り幅・高さ不明。

表2 SK22

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
2-1	土師器杯 A	(14.8)	2.8		白色砂粒を含む。	良好	暗茶褐色	内面ナデ、内外面スス付着、底部外面ヘラケズリ。
2-2	土師器杯 A	(16.8)	不明		黒・白色砂粒を含む。	良好	赤褐色	口縁部内面ナデ、外面ヘラケズリ。
2-3	土師器杯 A	(20.0)	(3.3)		0.1~1.0mm大の砂粒を含む。	良好	赤褐色	内面ナデ。
2-4	土師器皿 A	16.7	(2.1)		多量の砂粒を含む。	良好	赤褐色	内外面ナデ。
2-5	土師器皿 A	(17.4)	不明		細かい砂粒を少し含む。	良好	淡赤褐色	底部外面ヘラケズリ。
2-6	土師器皿 A	(18.6)	2.4		0.5~2.0mm大の砂粒を含む。	良好	赤褐色 内面：淡赤褐色	内外面ナデ。
2-7	土師器皿 A	18.4	2.5		0.1~0.5mm大の砂粒を含む。	良好	赤褐色	外面ヘラケズリ、底部外面に指頭痕、体部外面に黒斑と右回り方向の刮み数本有り。
2-8	土師器皿 A	(19.8)	2.6		白色砂粒を含む。	良好	暗茶褐色	外面ヘラケズリ、内面スス付着。
2-9	土師器皿 A	21.6	2.2		0.1~0.5mm大の砂粒を含む。	良好	赤褐色	外面ヘラケズリ。
2-10	土師器皿 A	(22.8)	不明		黒色砂粒を含む。	良好	茶褐色	外面ヘラケズリ。
2-11	土師器皿 C	(7.8)	1.5		黒色砂粒と微量の雲母を含む。	良好	明茶褐色	口縁部ナデ、底部外面無調整、指頭痕・粘土巻き上げ痕有り。
2-12	土師器椀 A	(11.4)	不明		2~3mm大の砂粒を含む。	良好	赤褐色	口縁部外面ナデ。
2-13	土師器椀 A	(12.2)	不明		白色砂粒を含む。	良好	淡茶褐色 外面：赤褐色	ナデ不明。
2-14	土師器椀 A	(13.0)	不明		白・黒色砂粒含む。	良好	暗茶褐色	外面ヘラケズリ。
2-15	土師器壺 A	(19.5)	不明		乳白色砂粒を含む。	良好	黄褐色	ナデ不明、口縁部外面スス付着。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
2-16	土師器杯 B	(28.4)	不明		白・黒色砂粒を含む。	良好	茶褐色	内外面ナデ。
2-17	土師器杯 B	不明	不明	15.2	白・黒色砂粒を含む。	良好	茶褐色	
2-18	製塩土器	16.7	18.4		白色砂粒を多く含む。	良好	明赤褐色	内面ナデ、粘土積み痕。
2-19	製塩土器	16.2	不明		白色砂粒を多く含む。	良好	淡赤褐色	内面ナデ、粘土積み痕。
2-20	製塩土器	(16.4)	不明		白色砂粒を多く含む。	良好	内部:淡茶褐色 外面:淡赤褐色	内面ナデ、粘土積み痕。
2-21	製塩土器	(9.4)	不明		石英粒・長石粒・赤色クサリ礫を多く含む。	良好	赤褐色	底部。
2-22	製塩土器	不明	不明		石英粒・長石粒・赤色クサリ礫を多く含む。	良好	黒黄灰色	口縁部に黒斑、内面に布目。
2-23	緑陶器鉢	(17.0)	5.7		黒・褐色砂粒を含む。	良好	淡白褐色 胎は淡黄白色	ナデ不明、胎はほとんどはく落。
2-24	須恵器皿 A	(15.6)	2.1		黒・褐色砂粒を含む。	良好	淡灰白色	ナデ不明。
2-25	須恵器蓋	(13.8)	不明		黒色砂粒を含む。	良好	淡黒灰色	内外面ナデ。
2-26	須恵器蓋	(24.2)	不明		白・黒色砂粒を含む。	良好	淡灰褐色	内外面ナデ。
2-27	須恵器杯 A	(12.2)	(3.2)		白色砂粒を微量含む。	良好	明灰色	内面と口縁部外面・体部ナデ。
2-28	須恵器杯 A	(12.6)	(3.2)		黒・白色砂粒を含む。	良好	淡黒灰色	内外面ナデ。
2-29	須恵器杯 B	(13.6)	4.1	9.6	0.2~0.5mm大の砂粒を含む。	良好	黄灰色	内面ナデ。
2-30	須恵器杯 B	(16.2)	5.4	11.0	0.1~0.3mm大の砂粒を含む。	良好	灰色	内面ナデ。
2-31	須恵器杯 B	(17.6)	5.0	13.5	0.1~0.3mm大の砂粒を含む。	良好	灰色	ナデ不鮮明。
2-32	須恵器杯 B	不明	不明	(13.0)	白・黒色砂粒を含む。	良好	淡黒灰色	内外面ナデ。
2-33	須恵器杯 B	不明	不明	(14.0)	白色砂粒を含む。	良好	黒灰色	内外面ナデ。
2-34	須恵器杯 B	不明	不明	(16.0)	0.1~0.3mm大の砂粒を含む。	良好	灰色	
2-35	須恵器壺	(11.8)	不明		白色砂粒を含む。	良好	灰色	外面ナデ。

表3 SE09

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
3-1	須恵器蓋	(31.9)	不明		白色細砂粒、黒紫色斑を比較的多く含む。	良好	灰色	
3-2	須恵器壺	不明	不明	(15.2)	やや粗い砂粒を若干含む。黒紫色斑を含む。	良好	灰青色	内面自然輪。

表4 SK11

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
3-3	土師器壺 B	(25.5)	不明		0.5~1.0mm大の砂を含む。	良好	赤褐色	

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
3-4	土師器高杯	(29.3)	不明	不明	白色細砂粒を多量、灰色砂粒、赤色クサリ礫を若干含む。	普通	淡赤褐色	
3-5	須恵器葉蓋	(17.4)	4.1		1~2mmの白色砂粒、0.2~1mmの黒色砂粒を含む。	良好	灰色	
3-6	須恵器蓋	11.7	2.5		白色細砂粒を若干含む。黒紫色斑若干有り。	良好	暗灰色	内面に赤色顔料付着。

表5 SK46

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
3-7	須恵器杯蓋	(21.6)	不明		0.5~2mm大の白色・透明石、0.8mm大の黒色砂粒を含む。	やや良	淡黒灰色 一部黒灰色	天井部外面に曇書。
3-8	須恵器杯蓋	不明	不明		0.5~2mm大の白色・透明石、0.8mm大の黒色砂粒を含む。	やや良	淡黒灰色 一部黒灰色	7と同一個体か。

表6 SK34

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
3-9	土師器鉢	(24.6)	5.8		1mm大の白色・透明石を含む。	良好	茶褐色 一部淡褐色	底部外面ヘラケズリ。
3-10	製塩土器	(6.2)	不明		0.5mm前後の白色砂粒を多量に含む。	良好	明灰黒色	
3-11	製塩土器	(18.8)	不明		白色砂粒、クサリ礫を多く含む。	普通	赤褐色	
3-12	須恵器杯蓋	(22.3)	不明		白色砂粒、黒紫色斑を多く含む。	普通	暗灰色	
3-13	須恵器壺	(18.4)	不明	不明	0.5~1.0mmの白色砂粒を多く含む。	やや軟弱	淡灰黒色	胴部外面平行タタキ。
3-14	須恵器蓋A	(45.0)	(12.8)		やや大きな灰色砂粒、灰色チャート、黒色砂粒、長石粒を含む。	普通	灰白色	体部外面下半ヘラケズリ。

表7 SK35

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
3-15	土師器皿AⅡ	(15.8)	(2.5)		黒色砂粒、白色細砂粒、赤色クサリ礫を若干含む。	やや軟弱	淡赤褐色	
3-16	土師器皿AⅡ	(14.5)	(2.5)		白・黒色細砂粒、赤色クサリ礫を若干含む。	普通	赤褐色	
3-17	土師器皿AⅡ	(16.3)	(2.4)		白色細砂粒、赤色クサリ礫を含む。	やや軟弱	淡赤褐色	底部外面ヘラケズリ。
3-18	土師器杯AⅡ	18.3	4.0		黒色粒、赤色クサリ礫を若干含む。	不良	淡赤褐色	底部外面ヘラケズリ?
3-19	土師器皿AⅠ	(19.7)	(2.0)		白色砂粒、赤色クサリ礫を含む。	やや軟	淡赤褐色	
3-20	製塩土器	(8.1)	不明		白・灰・黒色砂粒を多く含む。	普通	淡黄褐色	
3-21	須恵器杯蓋	(19.7)	不明		白色細砂粒、紫黒色斑を含む。	良好	暗灰色	
3-22	須恵器杯	(16.7)	不明		白色砂粒、黒紫色斑を僅かに含むが、良好。	普通	淡灰青色	

表 8 SE08

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口徑	器高	底徑				
4-1	土師器杯 A	(16.8)	不明		1~3mm大の砂粒を少し含む。	良好	淡黄褐色	外面ナデ、体部外面に刻みキズ・指頭痕。
4-2	土師器杯 A	15.4	3.0		良好。	良好	淡茶色、濃茶色の部分有り	口縁部内外面ナデ。
4-3	土師器杯 A	14.8	3.5		白色砂粒を含む。	良好	淡茶色	口縁部内外面ナデ。
4-4	土師器杯 A	(18.7)	不明		緻密。	良好	淡茶褐色	口縁部内外面ナデ、体部外面に指頭痕のへこみ有り。
4-5	土師器杯 A	16.6	3.7		白色砂粒を含む。	良好	淡茶色	口縁部内外面ナデ。
4-6	土師器杯 B	(15.8)	(4.0)	(4.8)	白色砂粒を含む。	良好	茶褐色	内面に鮮明なナデ、外面に粗いケズリ、外面に黒褐色の付着物。
4-7	土師器杯 B	13.6	3.4	8.0	白色砂粒を含む。	良好	淡茶色 赤茶色斑有り	口縁部内外面・高台部ナデ。
4-8	土師器皿 A	(14.8)	不明		緻密。	良好	淡茶色	口縁部内外面ナデ。
4-9	土師器皿 A	14.2	1.7		白色砂粒を含む。	良好	淡茶色	口縁部内外面ナデ。
4-10	土師器皿 A	(21.2)	不明		2~3mm大の砂粒を多量に含む。	良好	淡茶色	口縁部内外面ナデ。
4-11	土師器蓋	(24.8)	不明		1mm以下の砂粒を少し含む。	良好	乳白色	内外面ナデ。
4-12	土師器杯 A	(12.0)	不明		白色砂粒を含む、緻密。	硬質	淡赤褐色	口縁部ナデ。
4-13	土師器杯 A	13.0	2.4		砂粒多く含む。	硬質	乳褐色	口縁部外面ナデ、底部外面に指頭痕。
4-14	土師器杯 A	13.0	2.5		砂粒含む、緻密。	硬質	白褐色	口縁部外面と内面ナデ、底部外面に粘土の継ぎ目跡。
4-15	土師器杯 A	13.1	2.5		白色砂粒を多く含む、粗い。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、底部外面に指頭痕。
4-16	土師器杯 A	13.0	2.4		緻密、きめ細かい。	硬質	乳白色	口縁部ナデ、底部外面に指頭痕。
4-17	土師器杯 A	13.0	2.8		緻密、きめ細かい。	硬質	淡褐色	口縁部ナデ、底部中央に約直径 3 cm のせん孔。
4-18	土師器杯 A	(13.0)	2.5		白・透明砂粒を微量に含む。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。灯明皿?
4-19	土師器杯 A	(13.0)	(2.7)		白色砂粒を微量に含む。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、底部内面ハケメ。
4-20	土師器杯 A	13.2	2.8		きめ細かい。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、工具を止めた跡。
4-21	土師器杯 A	13.3	2.6		粗い、5mmの砂粒を含む。	良好	淡褐色	口縁部外面ナデ、底部外面に指頭痕。
4-22	土師器杯 A	13.4	2.4		白色砂粒を含む、きめ細かい。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。
4-23	土師器杯 A	13.3	(2.5)		白色砂粒を少量含む。	良好	乳褐色	口縁部ナデ。
4-24	土師器杯 A	13.2	2.8		白色砂粒を含む。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、底部内面ハケメ。
4-25	土師器杯 A	13.1	2.9		きめ細かい。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。
4-26	土師器杯 A	(14.0)	不明		金雲母・白色砂粒を微量含む。	硬質	淡褐色	口縁部ナデ。
4-27	土師器杯 A	13.6	(2.9)		白色砂粒を含む。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
4-28	土師器杯 A	13.6	2.9		やや粗い。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。
4-29	土師器杯 A	13.6	2.5		金雲母を多量に含む。	良好	淡褐色 一部灰色	口縁部ナデ。灯明皿？
4-30	土師器杯 A	13.7	2.7		きめ細かい。	良好	淡褐色	口縁部と内面ナデ、底部内面ハケメ、底部外面に指頭痕。
4-31	土師器杯 A	13.6	2.9		きめ細かい。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。
4-32	土師器杯 A	13.6	(2.9)		白色砂粒と金雲母を含む。	良好	乳褐色	口縁部ナデ、油煙の跡、底部内面ハケメ、粘土の継ぎ目跡、底部中央にせん孔。
4-33	土師器杯 A	(13.6)	(2.7)		良好。	良好	乳褐色	口縁部ナデ、底部内面ハケメ。化粧土？
4-34	土師器杯 A	13.7	2.9		白色砂粒を多く含む。	良好	淡灰褐色	口縁部ナデ。
4-35	土師器杯 A	13.8	2.6		良好。	良好	乳褐色	口縁部ナデ。化粧土？
4-36	土師器杯 A	14.0	3.2		白色砂粒を含む。	良好	淡褐色	内面と口縁部外面ナデ、灯明皿。
4-37	土師器杯 A	14.2	2.4		白色砂粒を少量含む。	良好	淡赤褐色	内面と口縁部外面ナデ、底部内面ハケメ、内面にコテ跡。
4-38	土師器杯 A	14.0	2.8		金雲母を含む。	良好	淡黒褐色	内面と口縁部外面ナデ。
4-39	土師器杯 A	(14.0)	(2.7)		白色砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	口縁部ナデ、底部内面ハケメ。灯明皿？
4-40	土師器杯 A	(14.0)	不明		緻密。	硬質	淡赤褐色	口縁部ナデ。
4-41	土師器杯 A	(14.0)	不明		金雲母・白色砂粒を含む。	硬質	淡褐色	口縁部ナデ。
4-42	土師器杯 A	13.5	2.7		白色砂粒と金雲母を含む。	軟質	淡褐色	口縁部ナデ、油煙の跡、底部外面にコテ跡。
4-43	土師器杯 A	14.0	(2.3)		白色砂粒を多く含む。	軟質	淡褐色	口縁部ナデ、底部外面に指頭痕。
5-1	土師器杯 A	14.0	(2.4)		良好。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。
5-2	土師器杯 A	14.6	2.4		金雲母・白色砂粒を含む。	やや軟質	淡褐色	口縁部ナデ、油煙の跡、底部外面に指頭痕。灯明皿？
5-3	土師器杯 A	14.7	2.7		白・赤色砂粒を含む。	良好	乳褐色	口縁部ナデ、粘土の継ぎ目。
5-4	土師器杯 A	15.0	3.0		良好。	硬質	淡褐色	口縁部ナデ、底部外面に指頭痕。
5-5	土師器杯 A	14.6	3.0		赤色砂粒を微量に含む、精密。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、底部外面に指頭痕。
5-6	土師器杯 A	14.9	2.6		白色砂粒を含む。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、内面にコテ跡約5ヶ所
5-7	土師器杯 A	15.0	2.7		白色砂粒を含む。	硬質	淡褐色	口縁部と内面ナデ、底部内面ハケメ、3列の粘土の継ぎ目。
5-8	土師器杯 A	14.8	2.8		金雲母を含む、精密。	硬質	淡褐色	口縁部ナデ、底部外面に指頭痕。化粧土？
5-9	土師器杯 A	14.8	2.8		非常に精密。	硬質	淡褐色	口縁部ナデ。化粧土？
5-10	土師器杯 A	15.3	2.8		白色砂粒を少量含む、精密。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。
5-11	土師器杯 A	(14.9)	(2.8)		砂粒を微量に含む。	硬質	淡褐色	口縁部ナデ・工具跡、底部外面に指頭痕。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
5-12	土師器杯A	15.2	(2.5)		白色砂粒を多く含む。	軟質	淡褐色	口縁部ナデ、内面に2ヶ所コテあて跡。
5-13	土師器杯A	15.4	2.7		白色砂粒を含む。	軟質	淡褐色	口縁部ナデ、底部外面に指頭痕。
5-14	土師器杯A	15.3	2.8		白色砂粒を含む。	軟質	淡褐色	口縁部ナデ、底部内面ハケメ、底部外面に指頭痕。化粧土？
5-15	土師器杯A	15.7	2.7		白色砂粒を多く含む、粗い。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。
5-16	土師器杯A	15.6	3.0		白色砂粒を少量含む、精密。	良好	淡褐色	口縁部と内面ナデ、底部内面ハケメ。
5-17	土師器杯A	15.6	3.2		白・赤色砂粒を含む。	良好	乳褐色	口縁部ナデ、油煙の跡、底部中央にせん孔。
5-18	土師器杯A	15.5	3.1		緻密。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、底部内面ハケメ、粘土の織ぎ目。
5-19	土師器杯A	16.0	3.6		緻密。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、底部内面ハケメ、口縁部内面にコテあて跡、粘土の織ぎ目。
5-20	土師器杯A	(16.0)	2.4		白色砂粒を微量に含む、緻密。	良好	淡褐色	口縁部ナデ。
5-21	土師器杯A	(16.0)	(2.5)		緻密。	硬質	乳褐色	内面と口縁部外面ナデ、底部内面ハケメ。
5-22	土師器杯A	(16.0)	2.9		緻密。	良好	淡褐色	内面と口縁部外面ナデ、底部内面ハケメ。
5-23	土師器杯A	20.0	(3.9)		緻密。	硬質	灰白色	口縁部ナデ。
5-24	土師器杯A	(19.5)	(4.1)		緻密。	硬質	淡褐色	口縁部ナデ、底部内面ハケメ。
5-25	土師器杯B	不明	不明	7.2	白色砂粒を多く含む。	良好	淡褐色	口縁部と高台部ナデ。
5-26	土師器杯B	(15.2)	(3.7)	(3.7)	白色砂粒を多く含む。	良好	淡灰褐色	口縁部と高台部ナデ、底部内面に工具の跡。
5-27	土師器杯B	16.6	3.5	3.4	砂粒を多く含む。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、底部外面に指頭痕。
5-28	土師器杯B	16.2	4.0	3.6	良好。	良好	淡褐色	口縁部ナデ、内面にコテ跡、底部中央にせん孔。
5-29	土師器杯B	(20.0)	(3.1)	(5.1)	粗い砂粒を多く含む。	軟質	淡褐色	高台部ナデ。
5-30	土師器皿A	(13.3)	(2.0)		緻密。	良好	灰褐色	内面と口縁外面ナデ、底部内面ハケメ。
5-31	土師器皿A	13.5	2.0		緻密。	良好	乳赤褐色	口縁部と内面ナデ、底部内面ハケメ。
5-32	土師器皿A	(16.0)	(1.6)		金雲母を含む、緻密。	硬質	淡褐色	内面と口縁外面ナデ。
5-33	土師器皿A	(17.0)	(1.2)		赤・黒色砂粒を微量に含む。	良好	乳褐色	
5-34	黒色土器A類杯	15.5	4.6		白・黒色砂粒と雲母を含む。	良好	内部：黒色 外部：茶褐色	外面ナデ、内面にミガキ・暗文。
5-35	黒色土器A類杯	(18.8)	(4.7)	(9.5)	白色細砂粒と雲母を含む。	良好	外部：暗茶褐色	
5-36	黒色土器A類碗	(18.2)	不明		白色砂粒と雲母を含む。	良好	内部：黒色 外部：淡赤褐色	内面ヘラケズリ、外面ナデ。
5-37	黒色土器A類高台		不明	(8.4)	白色砂粒と雲母を含む。	良好	赤褐色	内面ヘラケズリ、外面ナデ不鮮明。
5-38	黒色土器A類鉢	(15.0)	不明		白色砂粒と雲母を含む。	良好	内部：黒色 外部：淡茶褐色	口縁部内外面ナデ。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
5-39	黒色土器A類 鉢	(21.4)	不明		紅・白色砂粒と雲母を含む。	良好	淡赤褐色	内面ヘラケズリ、外面ナデ不鮮明。
5-40	黒色土器A類 鉢	(24.4)	不明		細かい白色砂粒を含む。	良好	黒褐色	B類の可能性有り。
5-41	黒色土器A類 甕	(13.8)	(9.3)		白色砂粒と雲母を含む。	良好	内面・外口縁部は黒色、外体・底部は淡茶褐色	外面ナデ、内面ヘラケズリ接合痕有り。
5-42	緑釉陶器壺	不明	不明	(7.0)	緻密。	良好	暗茶色 釉は暗抹茶色	全面に釉(底部・高台部にも)。

表9 SE05

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
6-1	土 師 器 皿	10.3	1.9		3mmまでの砂粒を含む。	良好	内：淡橙白色 外：淡茶黄色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-2	土 師 器 皿	10.5	1.6		5mm大の石粒を含む。	良好	淡橙白色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-3	土 師 器 皿	10.3	1.9		1mm以下の砂粒を含む。	良好	橙白色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-4	土 師 器 皿	10.3	1.9		2.5mm以下の砂粒を含む。	良好	橙白色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-5	土 師 器 皿	10.4	2.2		2mm大の石粒を含む。	良好	淡橙白色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-6	土 師 器 皿	10.2	2.0		4mm以下の石粒を含む。	良好	淡橙白色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-7	土 師 器 皿	10.9	1.9		3mm以下の石粒を含む。	良好	茶白色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-8	土 師 器 皿	9.9	2.0		2mm以下の石粒を含む。	良好	淡橙色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-9	土 師 器 皿	10.0	2.1		2mm以下の石粒を含む。	良好	茶白色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-10	土 師 器 皿	10.3	1.8		密、1mm以下の石粒を含む。	良好	内：淡茶灰色 外：淡黒茶色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-11	土 師 器 皿	10.0	2.3		1mm以下の石粒を含む。	良好	茶白色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-12	土 師 器 皿	10.6	2.0		2mm以下の石粒を含む。	良好	白茶灰色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-13	土 師 器 皿	10.2	1.9		3.5mm大の石粒を含む。	良好	淡茶白色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-14	土 師 器 皿	10.3	2.0		2.5mm以下の石粒を含む。	良好	淡茶灰色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-15	土 師 器 皿	8.9	1.5		1.5mm以下の石粒を含む。	良好	淡茶白色	底部内面・口縁部内外面ナデ、底部外面板の痕跡。
6-16	土 師 器 皿	14.6	3.2		3mm以下の石粒を含む。	良好	淡橙色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-17	土 師 器 皿	14.7	2.7		1mm以下の石粒を含む。	良好	内：淡白茶色 外：淡橙茶色	底部内面・口縁部内外面ナデ、外面指頭痕有り。
6-18	土 師 器 皿	17.2	3.3		2mm以下の石粒を含む。	良好	茶灰色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-19	土 師 器 皿	17.3	2.4		3mm以下の石粒を含む。	良好	淡橙色	底部内面・口縁部内外面ナデ。
6-20	土 師 器 土 釜	(24.6)	不明		1.5mmまでの石粒を含む。	良好	茶白色 内：淡茶灰色	外面スス付着。鈎部はりつけ痕跡有り。
6-21	瓦 器 椀	15.0	5.5	6.0	ほとんど砂粒を含まない。	良好	茶白色 内：淡茶灰色	内・外面暗文、外面指頭痕、口縁部・高台にヨコナデ

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
6-22	瓦 器 碗	15.4	5.6	5.5	1mm以下の石粒を含む。	良好	茶白色 内：淡茶灰色	内外面暗文。
6-23	瓦 器 皿	9.9	1.8		1mm以下の石粒を含む。	良好	黒灰色	底部内面暗文・ナデ、口縁部内外面ナデ。
6-24	瓦 器 皿	9.4	1.7		1mm以下の石粒を含む。	良好	黒灰色 内部：白色	底部内面暗文・ナデ、口縁部内外面ナデ、底部外面指頭痕。
6-25	瓦 器 皿	9.4	1.6		緻密。	良好	黒灰色 内部：淡白色	底部 内面暗文・ナデ、口縁部内外面ナデ。
6-26	瓦 器 皿	9.5	1.9		0.5mm以下の石粒含む。	良好	黒灰色 内部：白灰色	
6-27	瓦 器 盤	(41.4)	(11.8)		0.7mm大の石粒含む。	良好	黒灰色、口縁部内外面：白	外面ケズリ・暗文、脚部ナデ・指頭痕、内面に暗文有り。

表 10 SK07

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
6-28	土 師 器 皿	(14.6)	3.0		0.1~1mm大の砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	内面と口縁部外面ナデ。
6-29	土 師 器 皿	(15.4)	2.7		0.5~1mm大の砂粒を含む。	良好	赤褐色	内面と口縁部外面ナデ。
6-30	土 師 器 皿	(17.4)	3.2		白・黒色砂粒と雲母を含む。	良好	茶褐色	内面と口縁部外面ナデ。
6-31	土 師 器 皿	10.2	1.6		0.5~1mm大の砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	内面と口縁部外面ナデ。
6-32	土 師 器 皿	10.0	1.5		0.1~3mm大の砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	内面と口縁部外面ナデ。
6-33	土 師 器 皿	10.4	1.7		5mm大の小石と白・黒砂粒、雲母を含む。	良好	明茶褐色	内面と口縁部外面ナデ。
6-34	土 師 器 皿	(10.6)	(2.1)		黒色砂粒を含む。	良好	淡茶褐色	内面と口縁部外面ナデ。
6-35	土 師 器 皿	10.5	1.7		白色砂粒と雲母を含む。	良好	淡褐色 一部淡灰色	内面と口縁部外面ナデ。
6-36	土師器台付皿	20.6	4.5	5.3	0.1~1mm大の砂粒を含む。	良好	黄灰色	皿部の底部内面以外ナデ、皿部底部内面に平行キズ有り。
6-37	土師器土釜	(22.8)	不明		白色・透明砂粒と雲母を含む。	良好	淡茶褐色	外面と口縁部内面ナデ、脚部より下スス付着。
6-38	瓦 器 碗	14.6	5.3	4.8	やや密、雲母を少量含む。	良好	やや黒っぽい 灰色	内面と口縁部外面・高台部ナデ、内面と体部外面暗文、底部外面に指頭痕。
6-39	瓦 器 碗	14.2	5.4	5.1	緻密。	良好	黒灰色	内面と口縁部外面・高台部ナデ、内面と口縁部外面体部暗文。
6-40	瓦 器 皿	9.4	1.6		1mm大の砂粒を含む。	良好	灰色	内面と口縁部外面ナデ、底部内面暗文。
6-41	瓦 器 皿	9.0	2.1		緻密。	良好	黒灰色、内部の一部：淡黒灰色	内面と口縁部外面ナデ、底部内面暗文。
6-42	瓦 器 皿	10.6	1.7		茶色砂粒を含む。	良好	紫がかった灰色	内面と口縁部外面ナデ、底部内面暗文。

表 11 SE03

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
7-1	土 師 器 皿	9.7	1.8		白・黒・透明砂粒と雲母を含む。	良好	暗茶褐色	内面と口縁部外面ナデ。
7-2	土 師 器 皿	9.9	1.9		白色砂粒と雲母を含む。	良好	淡赤茶褐色	内面と口縁部外面ナデ、 底部内面指頭痕。
7-3	土 師 器 皿	9.9	1.8		黒色砂粒と雲母を含む。	良好	淡白茶褐色	内面と口縁部外面ナデ、 体部・底部に一部ナデ有り。
7-4	土 師 器 皿	10.5	1.9		黒色砂粒と雲母を含む。	良好	淡灰茶褐色	内面と口縁部外面ナデ。
7-5	土 師 器 皿	9.6	1.6		白色砂粒と雲母を含む。	良好	淡暗茶褐色	内面と口縁部外面ナデ、 体部外面・底部に一部ナ デ有り。
7-6	土 師 器 皿	10.1	2.0		ほぼ良好、雲母を含む。	良好	淡灰茶褐色	口縁部と内面ナデ、体部外 面・底部に一部ナデ有り。
7-7	土 師 器 皿	10.3	2.3		白色砂粒と雲母を含む。	良好	淡白茶褐色	内面と口縁部外面ナデ。
7-8	土 師 器 皿	14.5	2.7		白・透明・黒・茶色砂粒を含む。	良好	淡茶白色 一部赤茶褐色	ナデ不鮮明。
7-9	土 師 器 皿	14.8	3.4		黒・白色砂粒を含む、雲母多い。	良好	暗茶褐色	内外面ナデ。
7-10	土 師 器 皿	14.5	2.0		0.2mm大の砂を含む。	良好	淡褐色	内面と口縁部外面ナデ、 中央に直径5mmの穴有り。
7-11	土 師 器 皿	14.1	2.5		0.2mm大の砂を含む。	良好	淡褐色	内面と口縁部外面ナデ。
7-12	土師器台付皿	不明	不明	10.8	2mm大の砂粒を含む。	良好	黄褐色	底部外面と高台部ナデ。
7-13	土師器土釜	21.8	不明		黒色砂粒と雲母含む。	良好	内口縁部：淡 白褐色 内体部：褐色	内面ナデ、外面ナデ不明 瞭、外面多量のスス。
7-14	瓦 器 皿	9.1	2.5		良好。	良好	灰黒色	内面と口縁部外面ナデ、 底部内面暗文有り。
7-15	瓦 器 皿	8.8	2.0		良好。	良好	黒灰色	内面と口縁部外面ナデ、 底部内面暗文。
7-16	瓦 器 皿	8.9	1.6		白色砂粒を含む。	良好	黒灰色	内面と口縁部外面ナデ、 底部内面暗文。
7-17	瓦 器 皿	8.9	2.2		白色砂粒を含む。	良好	やや薄い黒灰 色	内面と口縁部外面ナデ、 底部内面暗文。
7-18	瓦 器 皿	9.2	2.1		白色砂粒を含む。	良好	淡黒灰色	内面と口縁部外面ナデ、 底部内面暗文、底部外面 に同心円状の指掌痕有り。
7-19	瓦 器 皿	9.0	1.8		良好。	良好	白灰色	口縁部ナデ、底部内面暗 文、底部外面指頭痕。
7-20	瓦 器 皿	9.2	1.4		良好。	良好	暗灰色	内面と口縁部外面ナデ、 底部内面暗文。
7-21	瓦 器 皿	9.6	2.0		白色砂粒を含む。	良好	黒灰色、赤茶 色の部分有り	内外面ナデ、底部内面暗 文、口縁部内面指頭痕有 り。高台付。
7-22	瓦 器 碗	14.3	5.5		良好。	良好	薄黒灰色	口縁部内外面ナデ・暗文。
7-23	瓦 器 碗	14.9	5.4		白色砂粒を含む。	良好	黒灰色	口縁部ナデ、内面・体部 外面暗文。
7-24	瓦 器 碗	14.4	5.0		白色砂粒と雲母を含む。	良好	黒灰色	底部内面ナデ、内面・口 縁部外面・体部暗文、外 面指頭痕多い。
7-25	瓦 器 碗	15.0	5.3		白色砂粒を含む。	良好	黒灰色、白灰 色の部分有り	底部内面ナデ、内面・口 縁部外面・体部暗文・指 掌痕。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
7-26	瓦 器 碗	14.6	5.2		良好。	良好	暗灰色	口縁部外面ナデ、内面・口縁部外面・体部暗文。
7-27	瓦 器 碗	14.2	5.0		白・赤色砂粒を含む。	良好	黒灰色	口縁部外面ナデ、内面・口縁部外面・体部暗文、口縁部内面ナデ。
7-28	瓦 器 碗	13.6	5.1		白色砂粒を含む。	良好	黒灰色	口縁部・底部内面ナデ、内面・口縁部外面・体部暗文。
7-29	瓦 器 碗	14.6	5.5		白・透明砂粒を含む。	良好	黒灰色 一部白灰色	口縁部ナデ、内面・口縁部外面・体部暗文。

表 12 SE04

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
7-30	土 師 器 皿	9.4	1.7		黒色砂粒と雲母を含む。	良好	淡灰褐色	口縁部と内面ナデ。
7-31	土 師 器 皿	(8.8)	1.3		黒色砂粒と雲母を含む。	良好	淡白赤褐色	口縁部と内面ナデ。
7-32	土 師 器 皿	(9.6)	1.9		黒・赤色砂粒と雲母を含む。	良好	淡白赤褐色	口縁部と内面ナデ、底部外面に指頭痕。
7-33	土 師 器 皿	13.8	3.3		赤色砂粒を多く含む。	良好	淡灰褐色	口縁部ナデ。
7-34	瓦 器 皿	8.5	1.2		緻密。	良好	黒灰色	口縁部ナデ、底部内面暗文、底部外面に指頭痕。
7-35	瓦 器 皿	(8.2)	1.2		緻密。	良好	黒灰色	口縁部ナデ、底部内面暗文。
7-36	瓦 器 碗	(15.0)	(4.3)	5.4	黒色砂粒を少量含む。	良好	黒灰色	内面と口縁部外面ナデ、内面と口縁部外面暗文。
7-37	瓦 器 碗	(13.6)	不明		黒色砂粒を含む。	良好	黒灰色	口縁部ナデ、内面と口縁部外面暗文。
7-38	瓦 器 碗	(17.0)	不明		緻密。	良好	黒灰色	口縁部ナデ、内面と口縁部外面暗文。
7-39	瓦 器 碗	(14.8)	不明		黒色砂粒を少量含む。	良好	黒灰色	口縁部ナデ、内面と口縁部外面暗文。
7-40	瓦 器 碗	(14.4)	不明		黒色砂粒を少量含む。	良好	黒灰色	内面と口縁部外面ナデ、内面と口縁部外面に暗文有り。体部外面指頭痕多い。
7-41	瓦 器 甕	(25.6)	不明		白色砂粒を含む。	良好	黒灰色 白灰色(断面)	頸部外面はタタキの上からナデ、肩部外面から胴部にかけてタタキを施す。

表 13 SK19

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
8-1	土 師 器 皿	13.3	2.6		精緻、黒色砂粒を含む。	良好	淡褐色	底部内面ナデ。
8-2	土 師 器 皿	13.6	2.8		赤色砂粒を含む。	良好	淡褐色	底部内面と口縁部外面ナデ。
8-3	土 師 器 皿	13.4	2.4		0.3mmの砂粒を含む。	良好	白っぽい赤褐色	底部内面と口縁部外面ナデ。
8-4	土 師 器 皿	12.8	3.2		黒色砂粒を含む。	良好	淡茶褐色	底部内面と口縁部外面ナデ。
8-5	土 師 器 皿	13.8	2.8		黒色砂粒を含む。	良好	明茶褐色	底部内面と口縁部外面ナデ。

図版 番号	器 種	注 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
8-6	土 師 器 皿	13.3	3.7		良好。	良好	淡茶褐色	底部内面と口縁部外面ナデ。
8-7	土 師 器 皿	9.4	1.7		灰白色・黒色砂粒を含む。	良好	淡茶褐色	底部内面と口縁部外面ナデ。
8-8	土 師 器 皿	9.5	1.6		赤色砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	底部内面と口縁部外面ナデ。
8-9	土 師 器 皿	9.6	1.9		やや粗い、黒・白色砂粒を含む。	良好	明茶褐色	底部内面と口縁部外面ナデ。
8-10	土 師 器 皿	9.9	1.8		白色砂粒を含む。	良好	茶褐色	底部外面と口縁部内面ナデ。
8-11	土 師 器 皿	9.1	1.3		0.8mm大の銅色片を含む。	良好	茶褐色	口縁内外面ナデ。
8-12	土 師 器 皿	10.0	1.7		黒・白色砂粒を含む。	良好	茶褐色	底部外面と口縁部内面ナデ。
8-13	土 師 器 皿	9.0	1.4		黒・白色砂粒を含む。	良好	淡茶褐色	口縁部内外面ナデ。
8-14	土 師 器 皿	10.0	1.9		黒色砂粒を含む。	良好	茶褐色	内面と口縁部外面ナデ。
8-15	土 師 器 器台	10.4	5.2	7.0		良好	淡茶褐色	内外面ナデ。
8-16	土 師 器 器台	11.0	5.0	7.3	白色砂粒を含む。	良好	淡茶褐色	内外面ナデ。
8-17	土 師 器 器台	10.6	5.7	8.2	黒色砂粒を含む。	良好	淡茶褐色	内外面ナデ。
8-18	土 師 器 器台	11.0	4.7	7.7	白・赤色砂粒を含む。	良好	淡白褐色	内外面ナデ。
8-19	土 師 器 土釜	(26.4)	不明		白色砂粒を含む。	良好	内面：淡褐色 外面：淡赤褐色	外面スス付着。
8-20	土 師 器 土釜	(21.2)	不明		白色砂粒を含む。	良好	淡灰色	外面スス付着。
8-21	瓦 器 椀	12.3	4.9	4.3	黒色砂粒を含む。	良好	黒褐色 外面に白灰色の部分多い	内面と口縁部外面ナデ・暗文。
8-22	瓦 器 椀	13.2	3.8	4.5	黒色砂粒を含む。	良好	黒褐色 外面に白灰色の部分多い	口縁部外面ナデ、内面と口縁部外面暗文。
8-23	瓦 器 椀	13.2	4.2	4.0	赤茶色・白色砂粒を含む。	良好	灰色、白色の部分有り	内面と口縁部外面暗文、体部外面に指掌痕。
8-24	瓦 器 椀	13.4	4.6	5.6	良好。	良好	灰色、白色の部分有り	内面と口縁部外面暗文、体部外面に指掌痕。
8-25	瓦 器 椀	13.4	4.5	4.8	良好。	良好	黒灰色 外面に白灰色の部分多い	内面と口縁部外面ナデ。
8-26	瓦 器 皿	8.2	1.7		良好。	良好	黒灰色	内面と口縁部外面ナデ、底部内面暗文有り。外面指掌痕多い。
8-27	瓦 器 皿	8.2	1.6		良好。	良好	黒灰色	内面と口縁部外面ナデ、底部内面暗文有り。外面指掌痕多い。
8-28	瓦 器 皿	8.3	1.4		良好。	良好	黒灰色 淡灰色の部分有り	内面と口縁部外面ナデ、底部内面暗文有り。外面指掌痕多い。
8-29	瓦 器 皿	(8.6)	(1.8)		良好。	良好	灰色	底部内面暗文。
8-30	瓦 器 盤	(56)	10.5		1mm以下の白色砂粒を含む。外底面には0.2~0.3cm大の白色砂粒が多く付着。離れ砂と思われる。	良好	内面：黒褐色 外面：重ね焼で白灰色のところが多い	体部外面下半に弧状のハケ痕跡。底部外面離れ砂痕跡。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
8-31	須恵器片口鉢	29.7	11.0		白・黒色砂粒を含む。	良好	灰色	底部外面糸切り痕跡とワラ痕跡。
8-32	陶 器 搦 鉢	(18.8)	6.8		白色砂粒を含む。	良好	濃茶褐色	4mm間隔の8本の掃目を下から上に施している。
8-33	青白磁合子蓋	(7.8)	(2.2)		良好。	良好	淡青色	
8-34	青 磁 椀	(15.2)	不明	不明	0.2mm以下の黒・白色砂粒を含む。 軸に1.5mm以下の白色砂粒を含む。	良好	淡深緑色	
8-35	青 磁 椀	(20.4)	不明	不明	良好。	良好	暗濁緑色	
8-36	青 磁 椀	(17.2)	不明	不明	良好。	良好	灰黄緑色	
8-37	青 磁 椀	(19)	不明	不明	0.2mm以下の黒色砂粒を含む。	良好	淡薄緑灰色	
8-38	青 磁 椀		不明	(5.0)	0.2mm以下の黒色砂粒を含む。	良好	暗黒灰褐色、 軸は淡緑青灰色	
8-39	青 磁 椀		不明	(5.0)	0.1mm大の黒色砂粒を少量含む。	良好	暗淡黄褐色、 軸は淡緑色	
8-40	青 磁 皿	(4.8)	(2.3)		良好。	良好	暗淡灰黄褐色 軸は淡深緑色	

表 14 SE01

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
9-1	土 師 器 皿	9.8	1.7		0.5~1.0mmの砂。	良好	淡灰色	
9-2	土 師 器 皿	9.8	1.7		白色砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	内面・口縁部外面・体部ナデ。
9-3	土 師 器 皿	12.9	2.6		白色砂粒と雲母を含む。	良好	茶褐色	内面・口縁部外面・体部ナデ。
9-4	土師器台付皿	(8.6)	1.7		粗い。	良好	淡褐色	口縁部外面・体・高台部ナデ。
9-5	土 師 器 皿	(14.0)	(4.0)		透明砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	内面・口縁部外面・体部ナデ。
9-6	土 師 器 ミョウブ土器	(11.6)	不明		粗い、白・黒砂粒を含む。	良好	淡茶褐色	口縁部ナデ、外面スス。
9-7	須恵器片口鉢	28.0	不明		灰白色砂粒を含む。	良好	灰黒色	内外面ナデ。
9-8	白 磁 壺	不明	不明	(8.0)	白色砂粒を含む。	良好	淡いベージュ	底部外面墨書有り。
9-9	白 磁 椀	(16.5)	不明		良好。	良好	淡いベージュ	
9-10	白 磁 椀	(15.0)	不明		良好。	良好	淡いベージュ	
9-11	青 磁 椀	(12.4)	不明		黒・白色砂粒を含む。	良好	淡青緑色	内面と口縁部外面ナデ。
9-12	瓦 器 椀	(12.2)	不明		良好。	良好	灰色	内面と口縁部外面ナデ、 内面暗文。
9-13	常滑焼壺	(45.9)	不明		白色砂粒を含む。	良好	濃茶色	内外面ナデ。

表 15 SE07

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
9-14	土 師 器 皿	11.0	2.3		白色砂粒・シャモットを含む。	良好	淡白赤褐色	口縁部ナデ、スス付着。
9-15	土 師 器 皿	10.8	2.4		白色砂粒・雲母・シャモットを含む。	良好	淡赤褐色	口縁部と底部内面ナデ、底部外面指頭痕。
9-16	土 師 器 皿	10.8	2.3		白色砂粒・雲母・シャモットを含む。	良好	淡赤褐色	口縁部ナデ。
9-17	土 師 器 皿	11.0	2.3		白・黒色砂粒・雲母・シャモットを含む。	良好	淡赤褐色	口縁部と底部内面ナデ、底部外面指頭痕。スス付着。
9-18	土 師 器 皿	11.2	2.2		白色砂粒・雲母を含む。	良好	淡灰赤褐色	口縁部と底部内面ナデ、スス付着、底部外面に板の痕跡。
9-19	土 師 器 皿	11.1	2.1		白色砂粒・雲母を多量に含む。	良好	淡灰茶褐色	口縁部と底部内面ナデ、スス付着。
9-20	土 師 器 皿	(11.4)	2.6		白色砂粒・雲母・シャモットを含む。	良好	淡灰褐色	口縁部と底部内面ナデ。
9-21	土 師 器 皿	11.2	2.3		シャモットを多量に含み、雲母も含む。	良好	淡赤褐色	口縁部と底部内面ナデ。
9-22	土 師 器 皿	11.6	2.3		白色砂粒を多量に含む。	やや粗い	赤褐色	口縁部と底部内面ナデ。
9-23	土 師 器 皿	11.8	3.0		白色砂粒・シャモットを含む。	良好	淡白褐色	口縁部と底部内面ナデ。
9-24	土 師 器 皿	(11.4)	2.2		白色砂粒・雲母を含む。	良好	黒暗褐色	口縁部ナデ、スス付着。
9-25	土 師 器 皿	11.7	2.6		黒色砂粒とシャモットを含む。	良好	淡白赤褐色	口縁部と底部内面ナデ、底部外面指頭痕多い。
9-26	土 師 器 皿	11.8	2.2		白色砂粒・シャモットを含む。	良好	淡赤褐色	口縁部と底部内面ナデ、スス付着。
9-27	土 師 器 皿	11.8	2.7		雲母と1cm以上の白色石を数個含む。	良好	淡黄褐色	口縁部と底部内面ナデ、底部外面指頭痕と板の痕跡。
9-28	土 師 器 皿	12.5	2.9		5mm大の白色石を含む。	良好	淡白赤褐色	口縁部と底部内面ナデ、スス付着。
9-29	土 師 器 皿	8.0	1.3		雲母・シャモットを含む。	良好	淡赤褐色	口縁部ナデ。
9-30	土 師 器 皿	8.4	1.3		白色砂粒・雲母・シャモットを含む。	良好	淡白赤褐色	口縁部ナデ。
9-31	土 師 器 皿	8.3	1.1		白色砂粒・シャモットを含む。	やや粗い	赤褐色	ナデ不鮮明、底部外面指頭痕多い。
9-32	土 師 器 皿	9.0	1.6		シャモット多量に含む。	良好	淡白褐色	口縁部ナデ。
9-33	土 師 器 皿	8.7	1.5		シャモットを含む。	良好	淡白赤褐色	口縁部ナデ。
9-34	土 師 器 皿	9.0	1.5		白色砂粒・雲母を含む。	良好	淡灰赤褐色	口縁部ナデ。
9-35	土 師 器 皿	9.5	1.8		雲母を含む。	良好	淡白黄褐色	口縁部ナデ、内面に多量のスス。
9-36	土 師 器 ミアア土釜	5.2	2.4		良好。	良好	淡白褐色	底部外面以外ナデ。
9-37	土 師 器 ミアア土釜	(14.6)	不明		良好。	良好	白黄褐色	底部外面以外ナデ、外面に多量のスス。
9-38	土 師 器 土釜	21.2	不明					
9-39	土 師 器 土釜	24.5	不明					口縁部内面と外面ナデ、外面に多量のスス付着。
9-40	土 師 器 土釜	(20.3)	不明		白色砂粒・雲母を含む。	良好	暗褐色	内外面ナデ、外面に多量のスス付着。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
9-41	青磁碗	不明	不明	不明				
9-42	青磁碗	17.0	不明	不明				
9-43	白磁碗	9.2	2.6	不明				
9-44	白磁碗	不明	不明	5.0				

表 16 SK15

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
10-1	土師器皿	14.0	3.0		0.1~0.3mm大の砂を含む。	良好	淡白褐色	
10-2	土師器皿	14.0	2.5		0.1mm大の透明砂粒を多く含む。	良好	淡赤褐色	
10-3	土師器皿	12.8	2.8		0.1~0.5mm大の砂粒を多く含む。	良好	淡赤褐色	
10-4	土師器皿	12.4	2.8		0.1~0.5mm大の砂粒を多く含む。	良好	赤褐色	
10-5	土師器皿	13.0	2.8		0.1~0.5mm大の砂粒を含む。大粒の砂多く、底部外側に1cm大の石有り。	良好	淡褐色	
10-6	土師器皿	11.6	3.0		0.2~0.5mm大の砂を含む。	良好	淡赤褐色	口縁部内外面にスス付着。
10-7	土師器皿	11.0	2.4		0.1~0.3mm大の砂粒を多く含む。	良好	淡赤褐色	
10-8	土師器皿	10.8	1.4		0.1~0.3mm大の砂を含む。	良好	赤褐色	
10-9	土師器皿	10.4	1.6		0.1~0.3mm大の砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	
10-10	土師器皿	9.8	1.7		0.1~0.5mm大の砂粒を多く含む。	良好	淡赤褐色	
10-11	土師器皿	9.4	1.7		0.1~0.2mm大の砂粒を含む。	良好	赤褐色	
10-12	土師器皿	(9.0)	1.6		0.1~0.2mm大の砂粒を多く含む。	良好	赤褐色	
10-13	土師器皿	9.6	1.5		0.1~0.2mm大の砂を多く含む。	良好	淡赤褐色	
10-14	土師器皿	(8.6)	1.8		0.1~0.2mm大の砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	
10-15	土師器器台	(11.0)	不明	不明	全体に灰色の細かい砂の塊が見られる。	良好	乳白色	
10-16	瓦 器 碗	8.2	3.4	3.8	0.1~0.3mm大の砂粒を含む。	良好	暗灰色	
10-17	瓦 器 碗	7.6	不明	不明	0.1~0.3mm大の砂粒を含む。	良好	暗灰色	
10-18	瓦 器 皿	9.0	1.6		0.1~0.2mm大の砂粒を多少含む。	良好	暗灰色	
10-19	瓦 器 皿	11.0	1.8		0.1~0.2mm大の砂粒を多少含む。	良好	暗灰色	
10-20	瓦 器 蓋	20.4	3.9	17.0	0.1~0.5mm大の砂粒を含む。	良好	暗灰色	
10-21	陶 器 壺	不明	不明	10.0	0.1~1.0mm大の砂粒を含む。	良好	暗赤褐色	信楽焼か? 48と接合。

表 17 SK05

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
10-22	土 師 器 皿	11.2	2.2		金雲母片・黒色砂粒・白色砂粒・赤色クサリ礫を含む。	普通	淡灰赤褐色	
10-23	土 師 器 皿	11.0	2.5		雲母片・黒色砂粒・赤色クサリ礫を含む。	普通	淡赤褐色	
10-24	土 師 器 皿	11.0	2.6		0.2mm程度の白・黒・透明砂粒と雲母を含む。	良好	淡赤褐色	
10-25	土 師 器 皿	10.6	2.4		2mm以下の白色砂粒を含む。	良好	淡灰赤褐色	
10-26	土 師 器 皿	10.9	2.5		金雲母片・赤色クサリ礫・白色砂粒を含む。	普通	淡赤褐色	
10-27	土 師 器 皿	10.3	2.4		金雲母片・黒色細砂粒・赤色クサリ礫を含む。	普通	淡灰赤褐色	
10-28	土 師 器 皿	10.3	2.4		金雲母片・黒色砂粒・赤色クサリ礫を含む。	普通	暗灰赤褐色	底面外面板状痕跡。
10-29	土 師 器 皿	10.8	2.4		金雲母片・赤色クサリ礫・白色砂粒を含む。	良好	赤褐色	
10-30	土 師 器 皿	10.8	2.3		金雲母片・白色砂粒・赤色クサリ礫を含む。	良好	赤褐色	
10-31	土 師 器 皿	8.5	1.5		金雲母片・黒色砂粒・赤色クサリ礫を含む。	普通	淡灰赤褐色	
10-32	土 師 器 皿	8.8	1.5		金雲母片・赤色クサリ礫を含む。	普通	暗赤褐色	
10-33	土 師 器 皿	8.3	1.5		金雲母片・白色砂粒・赤色クサリ礫を含む。	普通	淡赤褐色	
10-34	土 師 器 皿	7.0	1.3		黒色細砂粒・やや大きな灰色砂粒を含む。	良好	灰白色	
10-35	土 師 器 皿	6.8	1.8		黒色砂粒・灰色チャートを若干含む。	良好	灰白褐色	
10-36	土師器土釜	(22.0)	不明		黒色砂粒・灰色チャートを含む。雲母片若干有り。	普通	暗灰褐色	外面全面スス付着。内面コケ付着。
10-37	土師器土釜	(18.5)	不明		黒色砂粒・灰色チャートをやや多く含む。	普通	灰褐色	口縁端部外側に折り曲げ。
10-38	白 磁 皿	(10.6)	不明		微細な黒色斑をまじえるが精良。	良好	乳灰色	中国製。口縁端部輪カキ取り。

表 18 SX01

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
10-39	土 師 器 皿	(12.3)	(2.7)		金雲母片・白色砂粒・赤色クサリ礫を含む。	普通	淡灰褐色	
10-40	土 師 器 皿	(11.3)	(2.4)		白色細砂粒・赤色クサリ礫を含むが精良。	良好	淡灰赤褐色	
10-41	土 師 器 皿	8.5	1.4		白色細砂粒・赤色クサリ礫を比較的多く含む。	普通	赤灰褐色	
10-42	土 師 器 皿	9.5	1.6		金雲母片・白色砂粒・灰色砂粒・赤色クサリ礫を含む。	普通	赤灰褐色	外面の一部・内面全体に墨痕。
10-43	土師器土釜	(14.8)	不明		0.2~0.5mm大の透明・灰色砂粒を多量に含む。雲母も少し含む。	良好	淡白黄褐色	
10-44	土師器土釜	(13.0)	不明		2mm以下の白・黄・透明砂粒を含む。	良好	暗灰褐色	口縁端部外側に折り曲げ。
10-45	土師器土釜	(15.0)	不明		0.5mm以下の透明・灰色砂粒を含む。	良好	淡白黄褐色	

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
10-46	瓦 器 碗	(12.4)	不明	不明	0.2mm大の白色砂粒を含む。	軟弱	灰色	
10-47	瓦 器 土 釜	(24.0)	不明		1mm以下の白色砂粒・灰色砂粒・透明砂粒を含む。	軟弱	淡黒灰色	
10-48	陶 器 壺	不明	不明	(11.4)	1~2mm大の白色砂粒、0.8mm大の透明砂粒を含む。	良好	赤茶褐色	信楽焼か?21と同一個体。
10-49	青 磁 碗	不明	不明	(6.0)	0.2mm大の黒色砂粒を僅かに含む。	良好	深緑灰色(軸)	中国製。
10-50	青 磁 碗	不明	不明	(6.2)	0.2mm大の黒色砂粒を僅かに含む。	良好	深緑灰色(軸)	中国製。
10-51	青 磁 碗	(15.8)	不明	不明	精良。	良好	深緑灰色(軸)	中国製。

表 19 SG01

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
11-1	瓦 器 碗	14.4	5.7		良好。	良好	黒灰色	内面密な暗文。内底面強いハケの上から暗紋。
11-2	瓦 器 碗	15.0	5.3		0.2mm大の白色砂粒を少量含む。	良好	黒灰色	内面密な暗文。外面暗文と指頭痕多、底部内面暗文と交差したナデ有り。
11-3	瓦 器 碗	14.6	5.5		0.3mm大の白色砂粒を少量含む。	良好	黒灰色	内面密な暗文、外面に不規則な暗文有り。内底面強いハケの上から暗紋。
11-4	瓦 器 碗	14.5	5.15		良好。	良好	灰黒色 一部灰白色	
11-5	瓦 器 碗	14.2	5.3		0.5mm以下の白・黒砂粒を少量含む。	良好	黒灰色	内面暗文多、内底面強いハケの上から暗紋。
11-6	瓦 器 碗	(14.9)	5.1		1mm大の黒色砂粒を含む。	良好	黒灰色 一部玉虫色	暗文多い。
11-7	瓦 器 碗	14.4	5.3		直径2mm以下の灰色小石を含む。	良好	黒灰色	内底面細かいハケ。
11-8	瓦 器 皿	9.0	1.9		1mm大の白色石を含む。	良好	灰色 一部黒灰色	内底面に平行方向のナデ有り。暗文なし。ゆがみ大。
11-9	瓦 器 皿	8.9	1.8		良好。	良好	灰色	
11-10	土 師 器 皿	(14.4)	2.3		4mm以下の透明・赤・白・灰色砂粒を多量に含む。	良好	白褐色	
11-11	土 師 器 皿	13.6	2.8		1.5mm以下の赤・黒・白・透明砂粒を多量に含む。	良好	淡赤褐色	
11-12	土 師 器 皿	13.7	2.8		3mm以下の白・赤・灰・透明砂粒を多量に含む。	やや粗い	濃赤褐色	
11-13	土 師 器 皿	14.0	3.0		3mm以下の白・灰・黒色砂粒を多量に含む。	やや粗い	白褐色	
11-14	土 師 器 皿	14.0	2.6		3mm以下の赤・透明砂粒と雲母砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	
11-15	土 師 器 皿	14.8	3.2		0.8mm大の白色石・雲母を含む。	良好	暗茶褐色	6片以上に分かれる。ナデ不鮮明。
11-16	土 師 器 皿	(14.8)	3.5		0.5~1mm大の白色砂粒と雲母砂粒を含む。	良好	暗茶褐色	不規則なナデ有り。
11-17	土 師 器 皿	(15.6)	3.0		1~2mm大の白色砂粒を少量、1mm以下の赤色砂粒と雲母砂粒を含む。	良好	淡紅褐色	

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
11-18	土師器皿	10.5	2.1		0.2mm大の黒色砂粒を含む。 雲母やや多い。	良好	淡褐色 内部:明茶褐色	9片以上に分かれる。内 底面ユビオサエ。一部ナ デ。
11-19	土師器皿	10.4	1.9		0.5mm大の白色石を含む。雲母。	良好	淡茶褐色	6片以上に分かれる。内 面に一部指頭痕有り。
11-20	土師器皿	10.5	1.8		粗い。1mm大の白・黒色石を多量 に含む。雲母。	良好	茶褐色	7片以上に分かれる。ナ デ不鮮明。
11-21	土師器皿	9.4	1.8		やや粗い。1mm大の白・黒色石を 含む。雲母少し。	良好	明茶褐色	
11-22	土師器皿	9.0	1.8		1mm大の白色石を含む。	良好	淡茶褐色と 茶褐色	内外面とも不規則なナデ。
11-23	土師器皿	10.5	1.9		1.5mm大の白色石を含む。雲母 やや多い。	良好	淡暗褐色	内底面に平行方向のナデ 有り。
11-24	土師器皿	10.1	2.3		1mm大の白色石を含む。雲母や やが多い。	良好	茶褐色。内面 中心:赤褐色	内底面に平行方向のナデ 有り。
11-25	土師器皿	9.5			やや粗い。0.8~1.5mm大の白・黒 色石と雲母を含む。	良好	茶褐色。一 部:淡茶褐色	内底面に多方向のナデ有 り。
11-26	土師器皿	10.0	1.8		やや粗い。1~2mm大の白・黒色 石を含む。雲母少量。	良好	明茶褐色	6片以上に分かれる。内 底面に多方向のナデ。
11-27	土師器皿	9.8	1.8		1~1.5mm大の白色石を含む。雲 母やや多い。	良好	淡褐色	内底面に平行方向のナデ 有り。
11-28	土師器皿	10.5	2.3		1~1.5mm大の白色石を含む。 3~4mm大の黒色石を含む。雲母 少量。	良好	茶褐色	内底面に多方向のナデ有 り。
11-29	土師器皿	9.4	1.9		0.3~1mm大の黒色砂粒を含む。 4mm大の黒色石を含む。雲母微 量。	良好	淡茶褐色	
11-30	土師器小椀	(6.2)	2.5		良好。	良好	淡白褐色	底部外面に墨書有り。
11-31	土師器 ミニチュア土釜	6.7 口径 8.3	3.1		僅かに赤色クサリ礫・灰色砂粒 を含むが、良好。	普通	灰白褐色	
11-32	土師器把手付 鉢	(9.2)	4.8		0.8mm大の白・黒砂粒と雲母を含 む。	良好	褐色	多方向のナデ有り。
11-33	土師器土釜	(12.2)	不明		1mm以下の白・灰・赤・黒・透明砂 粒と雲母を多量に含む。	良好	淡白灰褐色	内外面ヨコナデ。
11-34	土師器土釜	口径 (30.8)	不明		1.5mm大の白色砂粒を含む。0.5 mm以下の白・黒・灰・赤砂粒を多量 に含む。	良好	淡白黄褐色 内部:暗白灰 色	摩滅のためナデ不明瞭。
11-35	土師器土釜	(33.8)	不明		1mm大の灰・白・黒・透明砂粒を多 量に含む。	良好	淡白灰褐色	内外面ヨコナデ。
11-36	土師器土釜	17	不明		1mm以下の白色砂粒を含む。	良好	淡茶色 断面:黒色	
11-37	土師器土釜	21.6	不明		2mm以下の白色砂粒を含む。	良好	淡茶色 断面:黒色	
12-1	須恵器片口鉢	(31)	不明		1mm以下の白色砂粒を含む。外 口縁部は光沢のある深緑色。	良好	暗紫灰色	
12-2	灰釉陶器片口 鉢	28.6	11.7	5.6	3mm以下の白・黒色砂粒を含む。	良好	赤みがかった 灰色	内外面に緑灰色自然釉。
12-3	常滑焼甕	(43.6)	不明	不明	1mm以下の白・黒色砂粒を含む。 自然釉は1mm大の白色砂粒を多 く含む。	良好	暗黒こげ茶色 自然釉は白濁 暗緑色	
12-4	青磁碗	不明	不明	5.8	0.5mm以下の黒・茶色砂粒を含 む。	良好	暗淡緑灰色 釉は深緑色	中国製。
12-5	青磁碗	(22.8)	不明	不明	良好。	良好	暗い抹茶色	釉、貫入有り。中国製。
12-6	青磁碗	(17.2)	不明	不明	0.1mm大の黒色粒を含む。	良好	淡青緑色	中国製。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
12-7	青 磁 碗	(17.0)	不明	不明	良好。	良好	緑灰色	中国製。
12-8	白 磁 碗	(15.8)	不明	不明	良好。	良好	乳白色	中国製。
12-9	白 磁 碗	不明	不明	(6.4)	1mm以下の白色砂粒と0.1~0.2mm大の黒色砂粒を含む。	良好	暗黄白色 軸は黄白灰色	中国製。
12-10	白 磁 碗	不明	不明	6.4	0.1~0.8mm大の黒色砂粒を含む。	良好	灰白色	中国製。
12-11	白 磁 碗	(16.6)	不明	不明	0.1mm大の黒色砂粒を含む。	良好	灰白色	軸に貫入有り。中国製。
12-12	白 磁 碗	不明	不明	5.3	良好。	良好	灰白色	中国製。
12-13	白 磁 碗	17.2)	不明	不明	0.2mm大の黒色砂粒を含む。	良好	灰白色	内面、軸にたくさんの貫入有り。中国製。
12-14	白 磁 皿	不明	不明	3.2	緻密。	不良	黄灰白色	中国製。
12-15	瓦 器 碗	(12.2)	不明	5.4	良好。	良好	黒灰色	内面、口縁部外面暗文有り。
12-16	土 師 器 皿	12.0	3.1		3mm大の白・赤色砂粒と雲母を含む。	良好	淡赤褐色	
12-17	土 師 器 皿	11.0	2.8		1mm以下の白色砂粒を含む。	良好	灰白褐色	外面に多量の褐色土付着。
12-18	土 師 器 皿	12.0	2.3		2mm大の赤褐色砂粒、僅かに微少な雲母。	良好	淡褐色	
12-19	土 師 器 皿	12.3	2.7		3mm大の白色砂粒、1mm以下の赤・透明・黒色砂粒と雲母を含む。	やや	淡白茶褐色	
12-20	土 師 器 皿	12.4	2.8		5mm大の褐色砂粒、2mm大の白色砂粒、微少な石英・白雲母を含む。	良好	赤淡褐色	
12-21	土 師 器 皿	(7.8)	1.5		2mm以下の白色砂粒、1mm以下の透明・黒・赤色砂粒、雲母を含む。	良好	赤褐色	ナデ摩滅で不明。
12-22	土 師 器 皿	8.3	1.1		2mm以下の白色・灰色・赤褐色砂粒、僅かに微少な雲母。	良好	赤褐色	
12-23	土 師 器 皿	8.9	1.3		雲母、白・黒色砂粒を含む。	やや粗い	茶褐色	
12-24	土 師 器 皿	(9.0)	1.8		3mmの砂粒、赤・黒色砂粒、雲母を含む。	良好	淡茶褐色	
12-25	土 師 器 土 釜	(12.2)	不明		1mm以下の白・黒・赤・透明砂粒を含む。	良好	淡赤褐色	
12-26	土 師 器 土 釜	(18)	不明		0.5mm大の白色・透明砂粒を多く含む。	良好	淡白褐色	
12-27	土 師 器 土 釜	(22.4)	(17)		0.5mm以下の黒・赤・灰・白色砂粒と雲母を多く含む。	良好	淡白褐色、内部に紅色の部分有	外面スス付着。
12-28	須 恵 器 碗	(18.4)	不明	不明	3mm以下の白・黒色砂粒を多く含む。	良好	灰白色、外口縁部：黒灰色	
12-29	須 恵 器 片 口 鉢	(25)	不明	不明	0.2mm大の白色砂粒を含む。	良好	暗濃白灰色 内部：ススで黒色	
12-30	陶 器 底 知 目 皿	不明	不明	不明	良好。	良好	緑軸	
12-31	陶 器 瀬 戸 小 甕 (合子)	不明	不明	4.8	3mm以上の白色砂粒を含む。	普通	灰白色 軸葉：暗黄緑色	
12-32	白 磁 皿	(11.4)	不明	不明	0.1mm大の黒色砂粒を含む。	良好	薄灰色	口縁端部軸カキ取り。中国製。

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
12-33	白 磁 皿	(11.2)	不明	不明	0.2~0.5mm大の黒色石を含む。	良好	淡薄緑灰白色	口縁部軸カキ取り。 中国製。

表20 SD01

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
13-1	土 師 器 皿	7.2	1.2		長石粒・黒色砂粒を僅かに含む。	普通	淡黄褐色	口縁部内外面ナデ。
13-2	土 師 器 皿	(7.8)	1.6		黒・赤・白色砂粒を含む。雲母を多く含む。	やや軟	淡灰褐色	口縁部内外面ナデ。
13-3	土 師 器 皿	(8.0)	1.2		黒色砂粒を含む。	普通	灰褐色	口縁部外面ナデ。
13-4	土 師 器 皿	9.8	2.0		赤色クサリ礫・黒色砂粒を若干含む。	普通	淡黄褐色	口縁部内外面ナデ。
13-5	土 師 器 皿	10.4	2.3		赤色クサリ礫・黒色砂粒を若干含む。	やや軟	淡黄褐色	口縁部内外面ナデ。
13-6	土 師 器 皿	10.7	1.9		褐色砂粒を多く含む。	普通	白褐色	口縁部内外面ナデ。
13-7	土 師 器 皿	13.6	不明		褐色砂粒を多く含む。	良好	淡灰褐色	口縁部内外面ナデ。
13-8	土 師 器 皿	13.4	3.3		黒・白色細砂粒を僅かに含む。	堅緻	淡黄褐色	口縁部内外面ナデ。
13-9	土 師 器 皿	15.0	2.6		黒・褐色砂粒を含む。	良好	淡褐色	口縁部内外面ナデ。
13-10	土 師 器 皿	17.9	3.2		褐色砂粒を多く含む。	良好	淡灰褐色	口縁部内外面ナデ。
13-11	土 師 器 皿	16.6	3.1		長石細粒・灰色チャート・黒色砂粒を含むが良好。	普通	淡黄褐色	口縁部外面ナデ。
13-12	土 師 器 皿	(9.0)	2.2		黒・白色砂粒を多く含む。	普通	淡明赤褐色	口縁部内外面ナデ。
13-13	土 師 器 皿	9.8	2.3		赤・白色砂粒を含む。	普通	灰赤褐色	口縁部内外面ナデ。
13-14	土 師 器 土 釜	23.4	不明		白色砂粒を含む。	堅緻	淡黄褐色	鈎より下にス付属。
13-15	青 磁 碗	(15.6)	不明	不明	黒色砂粒を含む。	良好	暗淡緑色	中国製。

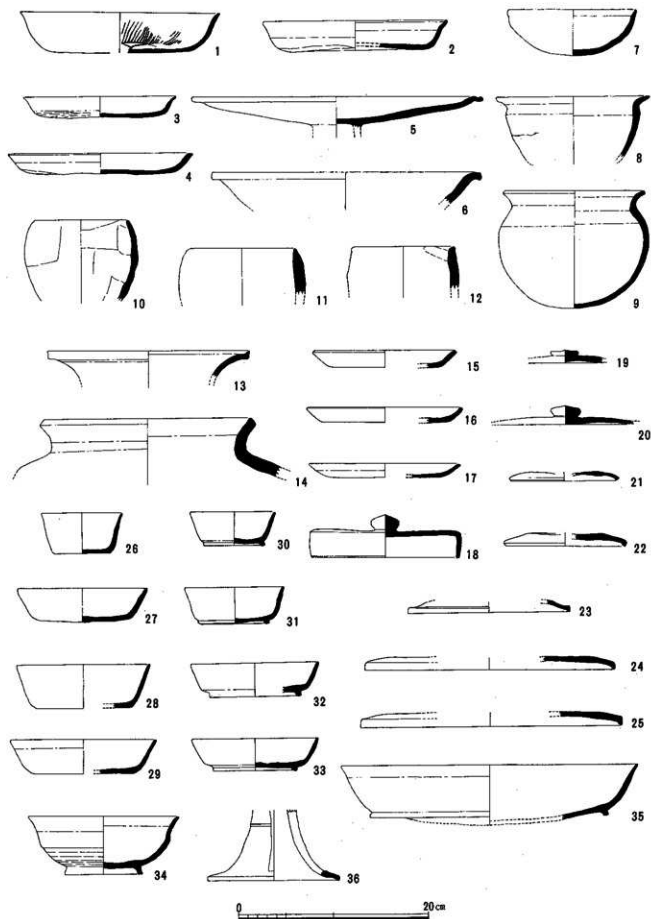
表21 SK20

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
13-16	土 師 器 皿	7.1	1.2		褐色砂粒を少量含む。	良好	淡褐色	口縁部内外面ナデ。底部外面オサエ縁。
13-17	土 師 器 皿	7.0	1.4		白っぽい砂粒を含む。	良好	淡褐色	口縁部内外面ナデ。
13-18	土 師 器 皿	10.1	2.6		褐色砂粒を少量含む。	良好	淡褐色	口縁部内外面ナデ。
13-19	土 師 器 皿	9.7	2.0		赤色クサリ礫・長石粒・黒色砂粒を若干含む。	やや軟	淡黄褐色	口縁部内外面ナデ。
13-20	土 師 器 皿	(9.8)	2.2		黒色砂粒を含む。	良好	淡褐色	口縁部外面ナデ。
13-21	土 師 器 皿	9.8	2.3		灰色砂粒・雲母を微量含む。	良好	淡白褐色	底部外面以外ナデ。

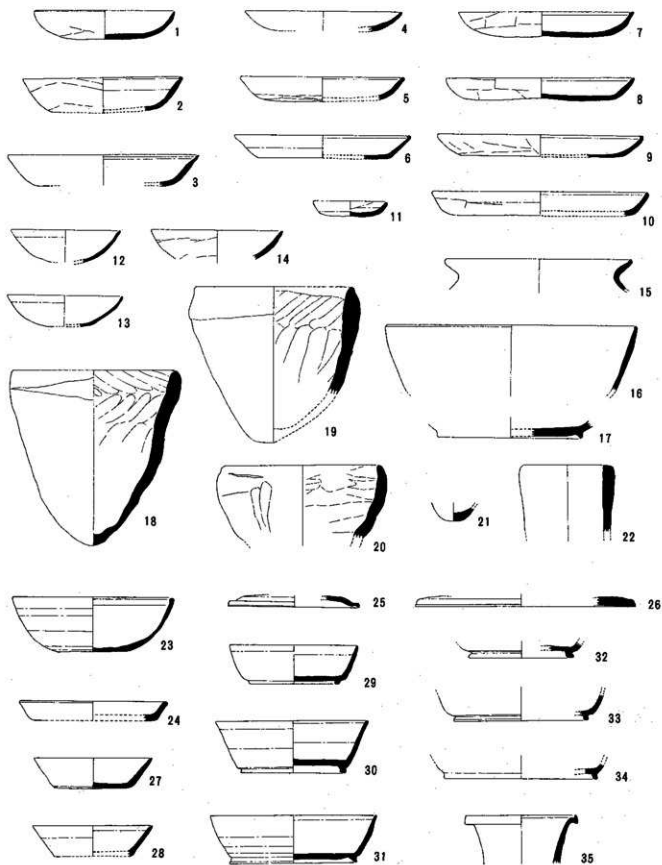
図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
13-22	土 師 器 皿	10.5	1.9		黒色砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	口縁部内外面ナデ。
13-23	土 師 器 皿	10.0	1.9		褐色・黒色砂粒を多く含む。	良好	淡黄褐色	口縁部内外面ナデ。
13-24	土 師 器 皿	10.4	1.6		黒色砂粒を多く含む。	良好	淡灰褐色	口縁部内外面ナデ。
13-25	土 師 器 皿	(10.0)	2.0		白色砂粒を含む。	良好	淡灰褐色	口縁部内外面ナデ。
13-26	土 師 器 皿	(9.8)	1.8		良好。	良好	淡褐色	口縁部内外面ナデ。
13-27	土 師 器 皿	12.9	2.7		1~2mmの砂粒を少量含む。	良好	淡黄褐色	内外面ナデ。
13-28	土 師 器 皿	(13.6)	2.7		黒色砂粒を含む。	良好	淡灰褐色	口縁部外面ナデ。
13-29	土 師 器 皿	12.8	2.8		白色砂粒を少量含む。	良好	淡褐色	外面ナデ。
13-30	土 師 器 皿	(13.4)	2.2		良好。	良好	淡褐色	
13-31	土 師 器 皿	(13.6)	(2.3)		白色砂粒を含む。	良好	淡灰褐色	口縁部内外面ナデ。
13-32	土 師 器 皿	12.7	2.2		白色砂粒を微量含む。	良好	淡赤褐色	口縁部内外面ナデ。
13-33	土 師 器 皿	13.3	2.7		細かい砂粒を含む。	良好	淡褐色	口縁部外面ナデ。
13-34	土 師 器 皿	12.7	3.2		良好。	良好	淡褐色	口縁部内外面ナデ。
13-35	土 師 器 皿	(13.0)	2.9		透明砂粒を少量含む。	良好	淡灰褐色	口縁部内外面ナデ。
13-36	土 師 器 皿	12.4	3.1		1~2mmの砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	口縁部内外面ナデ。
13-37	土 師 器 皿	(16.4)	(2.7)		黒色砂粒を含む。	良好	淡灰褐色	口縁部内外面ナデ。
13-38	土 師 器 皿	(16.4)	2.9		1~3mmの砂粒を少量含む。	良好	淡褐色	内面変色。
13-39	白 磁 碗	不明	不明	4.9	黒色砂粒を含む。	堅緻	淡灰褐色	底部内面に軸。中国製

表22 SE06

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
13-40	陶器両手鍋	(18.8)	不明		良好。	良好	淡暗黄褐色 軸：暗緑色	底部外面以外に軸。
13-41	陶 器 碗	12.2	不明	不明	良好。	良好	青みがかった 薄い灰色	体部外面に模様。
13-42	磁器小杯	不明	不明	2.6	黒色砂粒を含む。	良好	軸：淡青白色 須須：濃青色	全面に軸。外面に須須で 描いた模様。

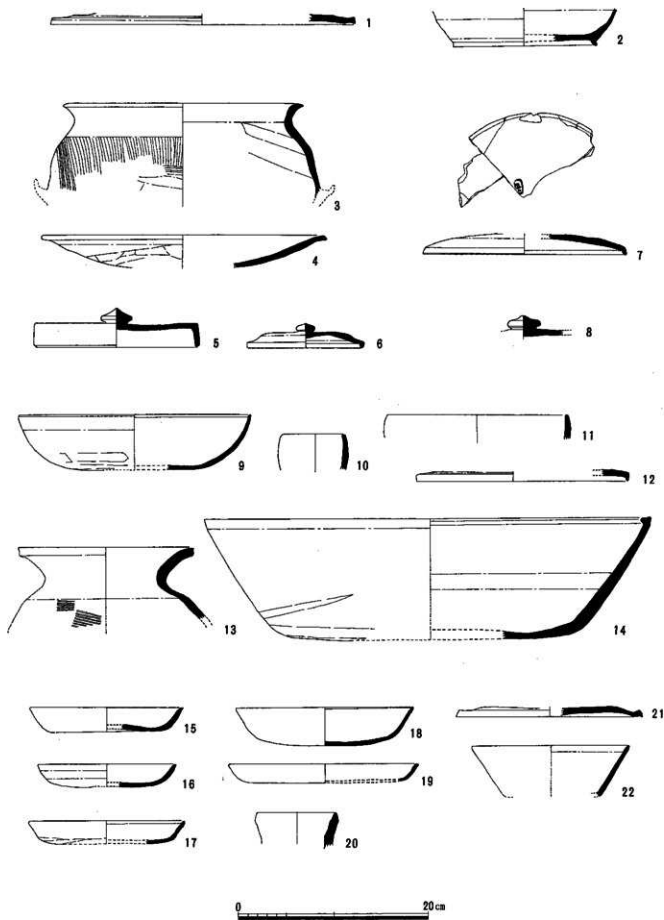


第1图 SD14 出土土器

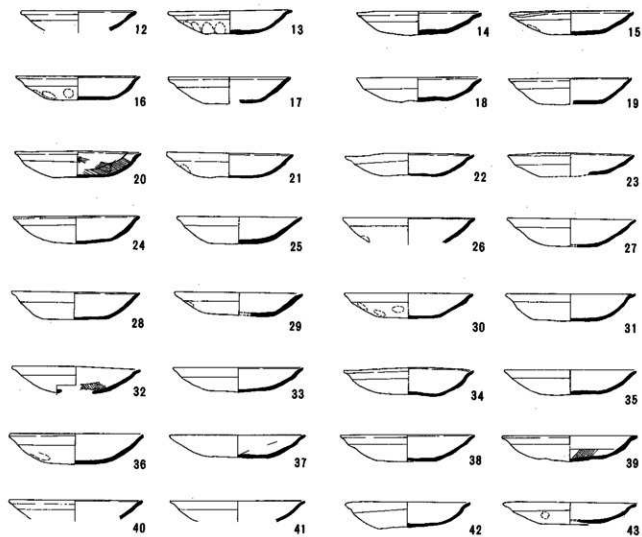
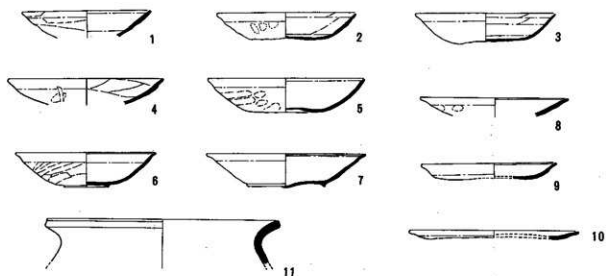


0 20cm

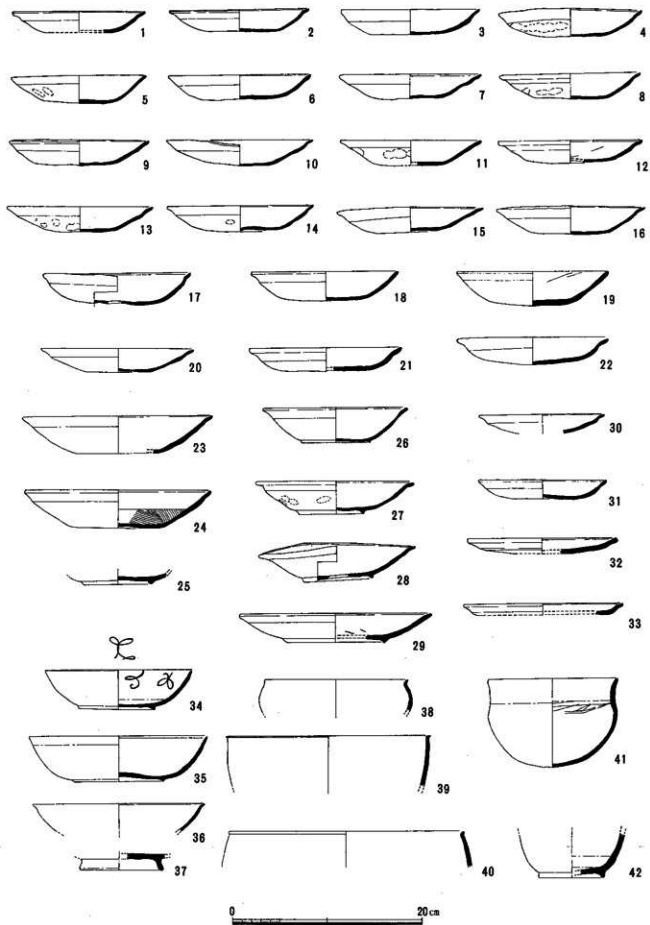
第2图 SK 22 出土土器



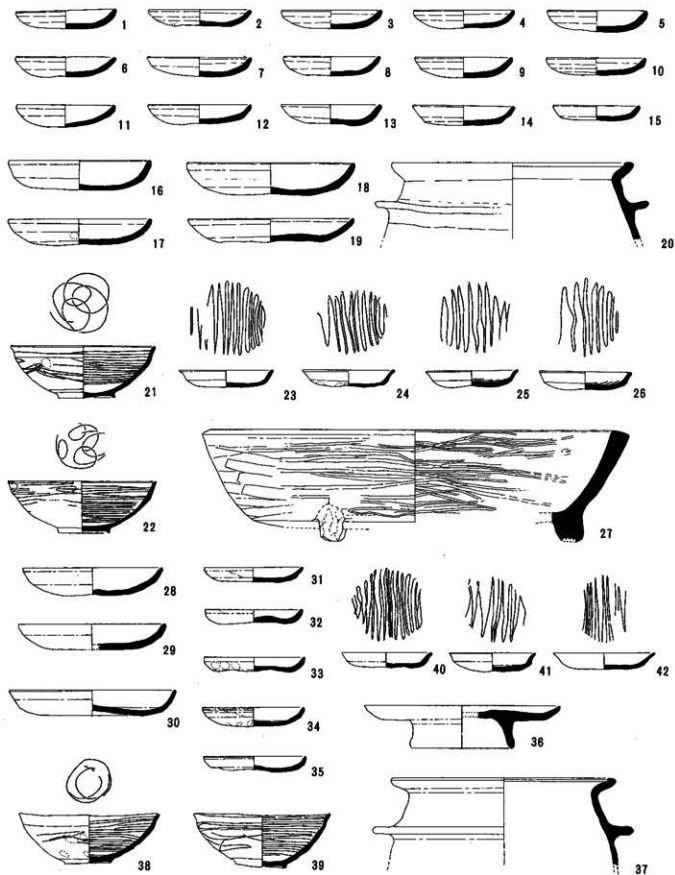
第3图 SE 09 · SK 11 · SK 46 · SK 34 · SK 35 出土土器



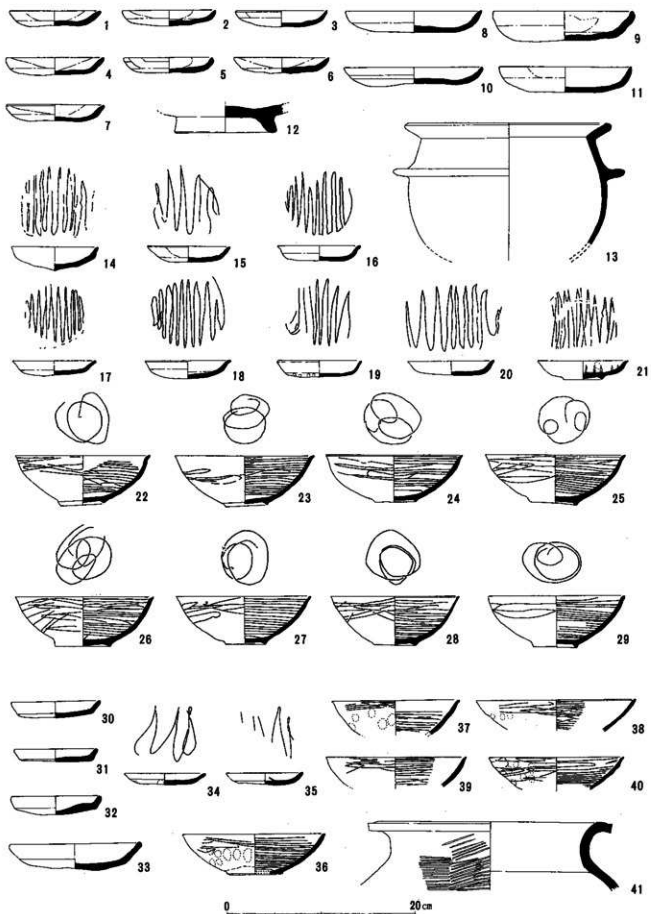
第4圖 SE 08 出土土器 (1)



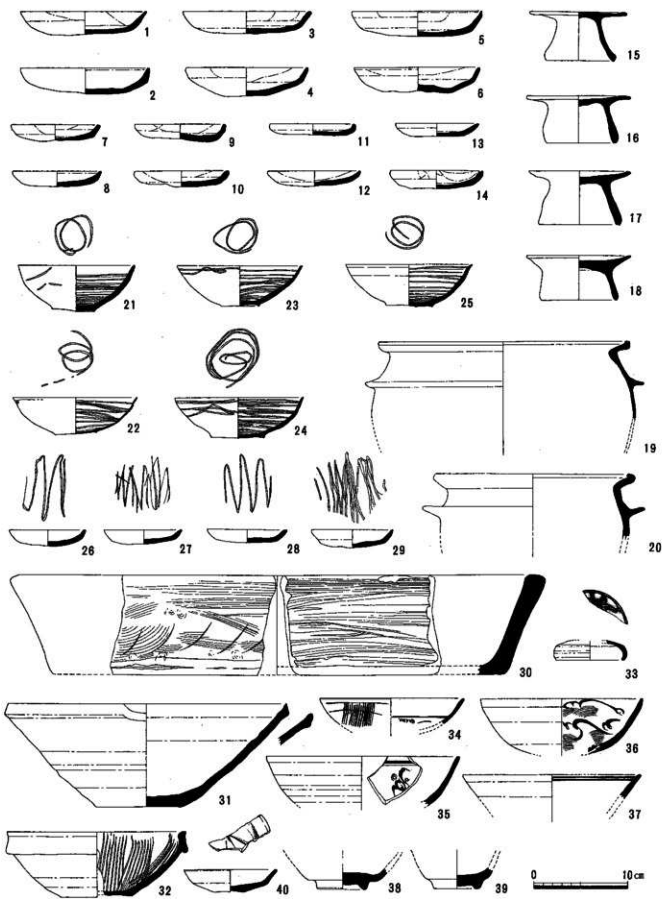
第5圖 SE 08 出土土器 (2)



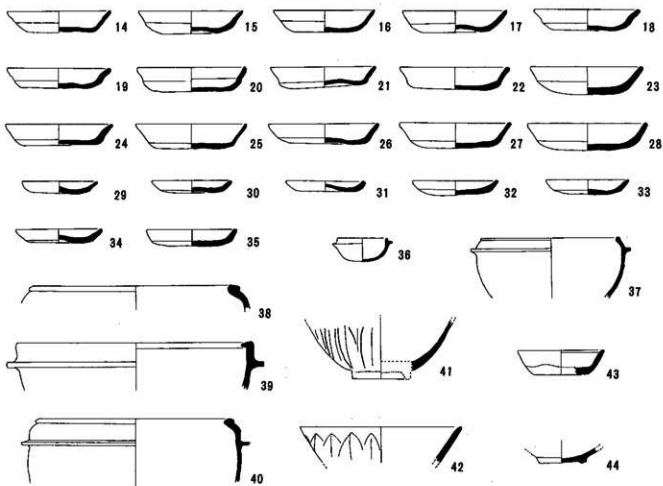
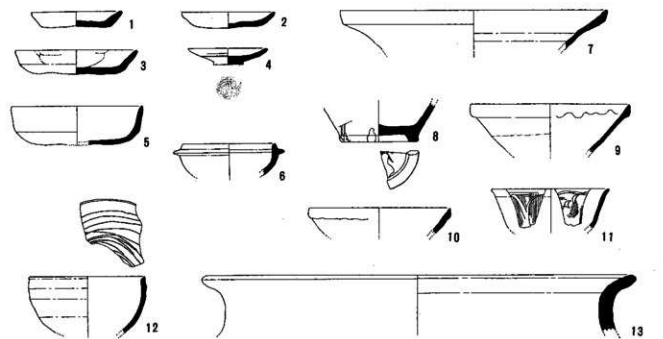
第6圖 SE 05・SK 07 出土土器



第7圖 SE 03・SE 04 出土土器

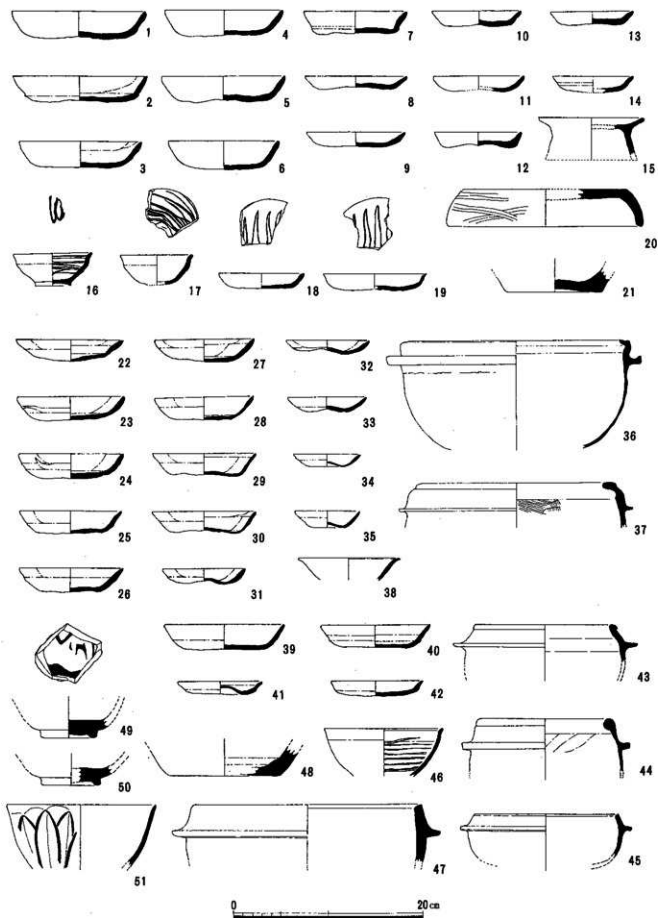


第8图 SK 19 出土土器

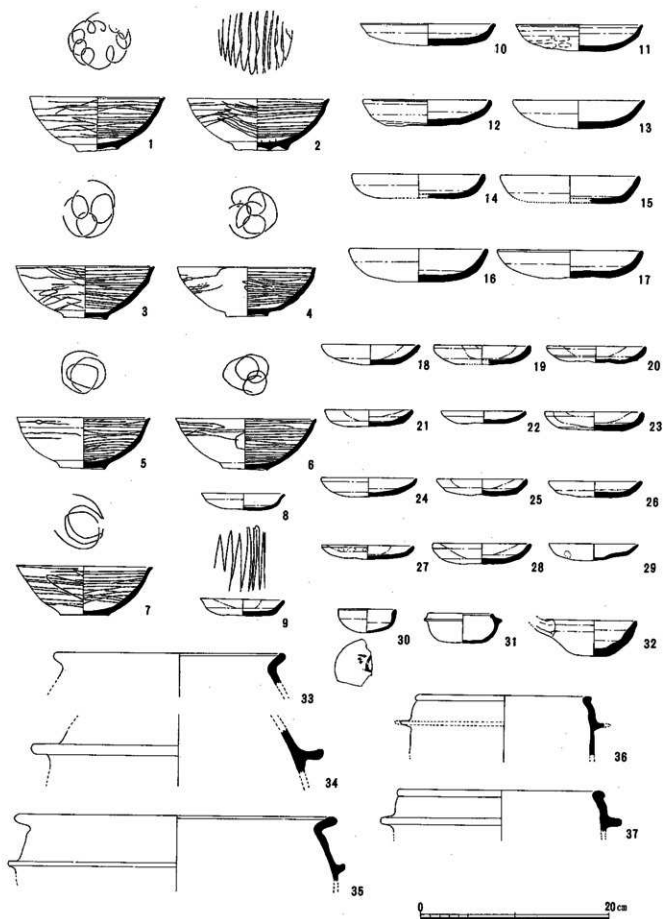


0 20 cm

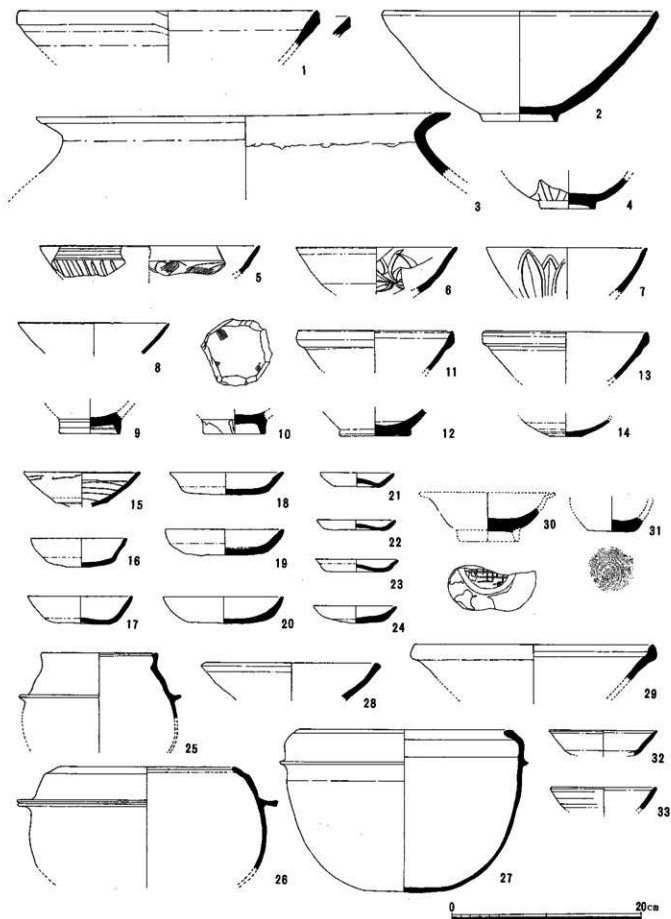
第9圖 SE 01・SE 07 出土土器



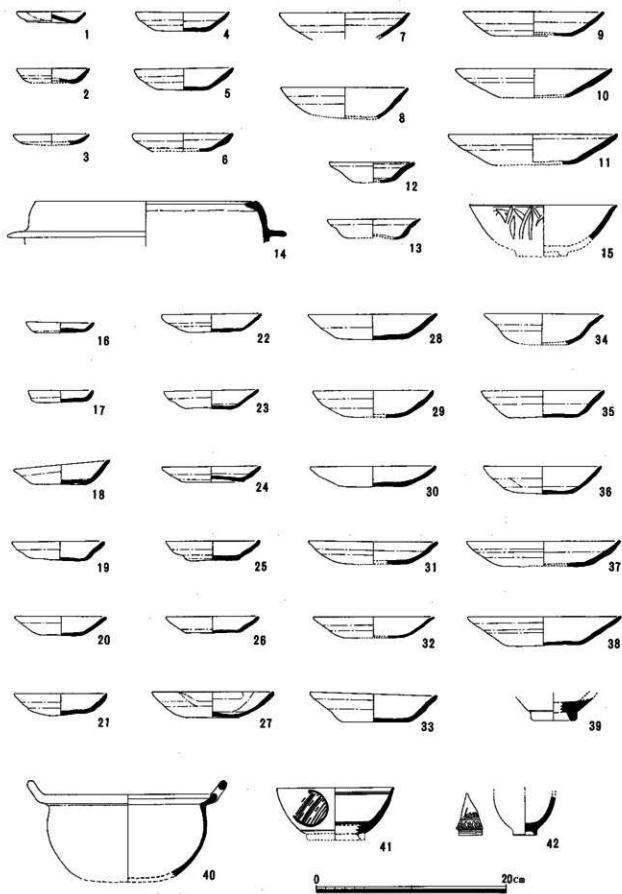
第10图 SK 15 · SK 05 · SX 01 出土土器



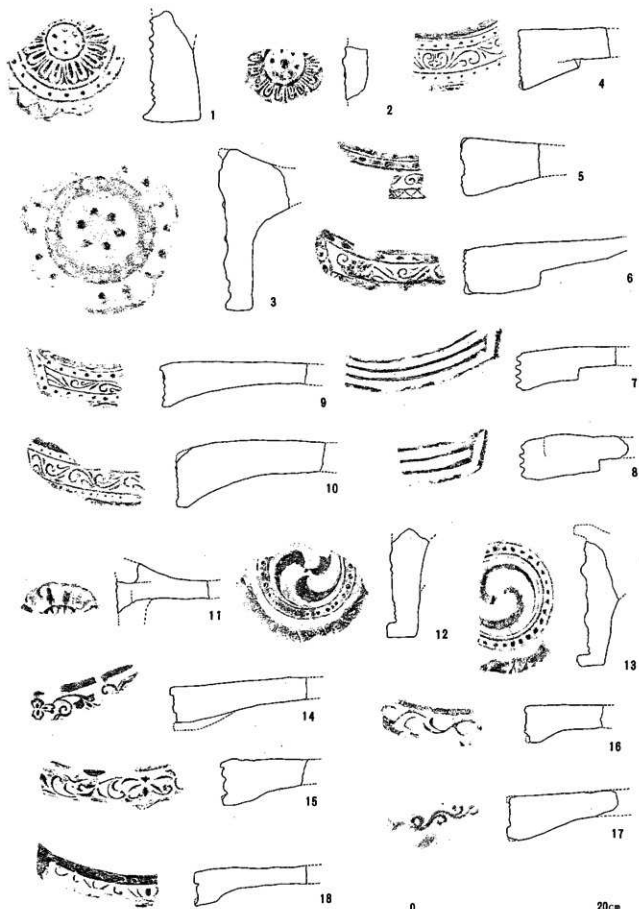
第11图 SG 01 出土土器 (1)



第12图 SG01 出土土器(2)



第13圖 SD01・SK20・SE06 出土土器



第14图 軒瓦



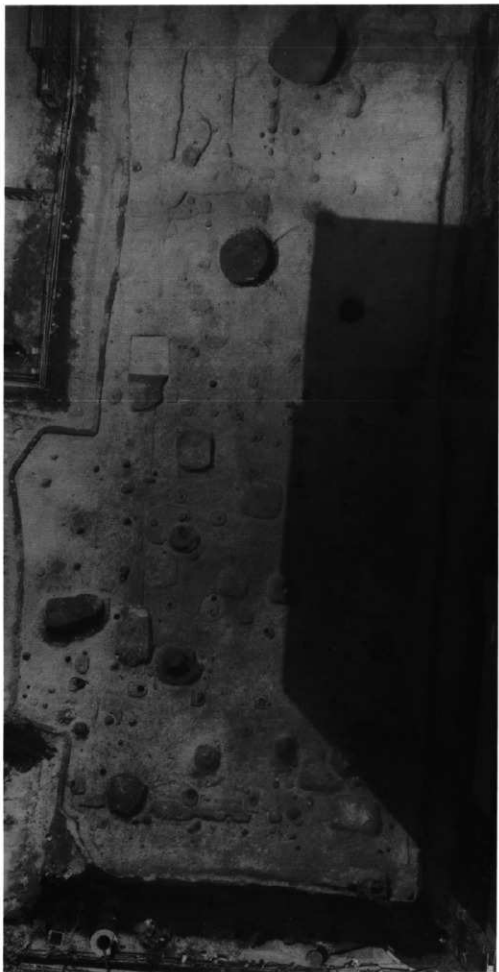
南から

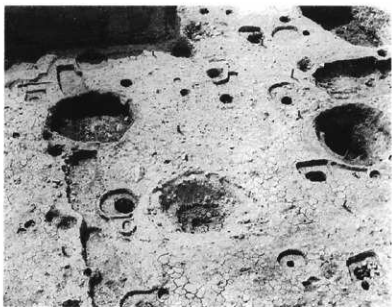


北から

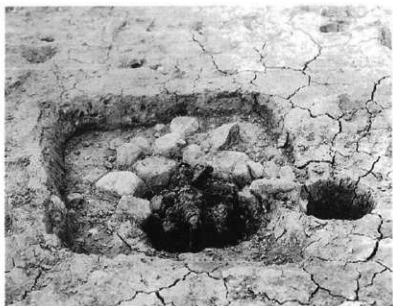


SD14





SB01



SB01柱穴



SB01柱穴



SE 03



SK 12



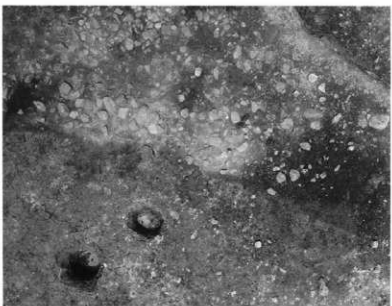
SK 19



SK 39・SK 15

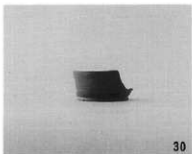
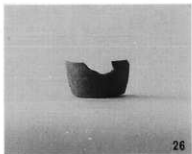


SX 01



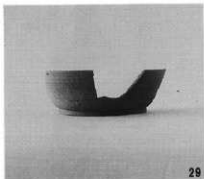
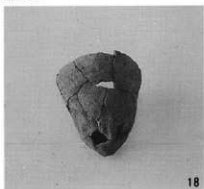
SX 01 (部分)

SD 14

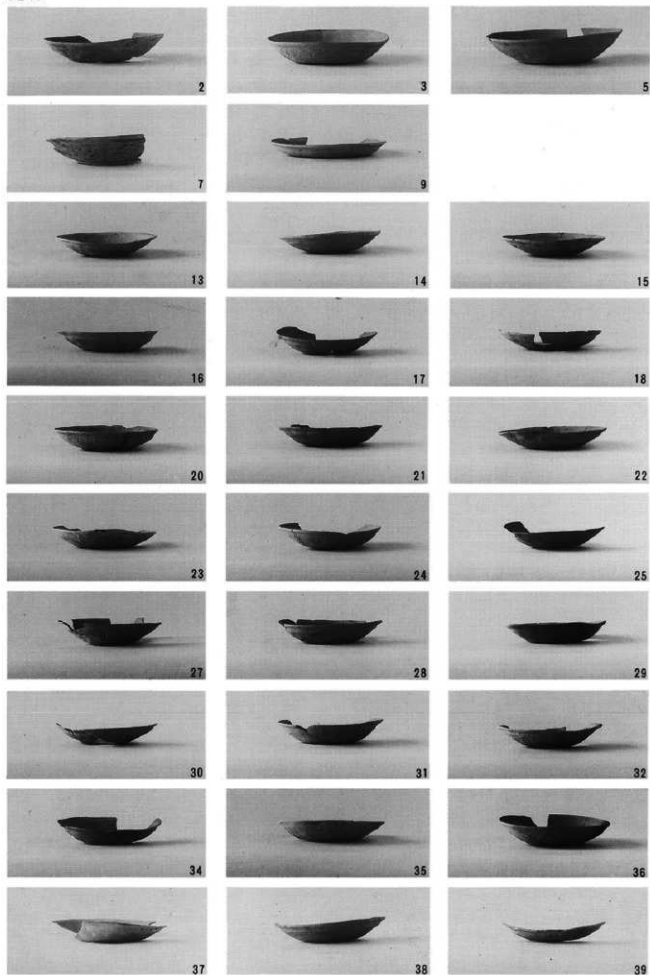


(第1図)

SK 22



(第2図)





42



43

(第 4 図)



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



27

(第 5 図)

SE 08



28



29



31



34



41



42

(第 5 図)

SE 05



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



16



17



18



21

(第 6 図)

SE 05



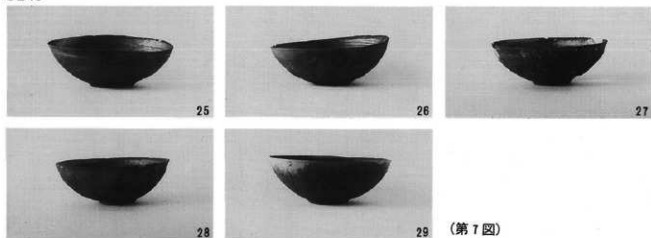
(第 6 図)

SE 03

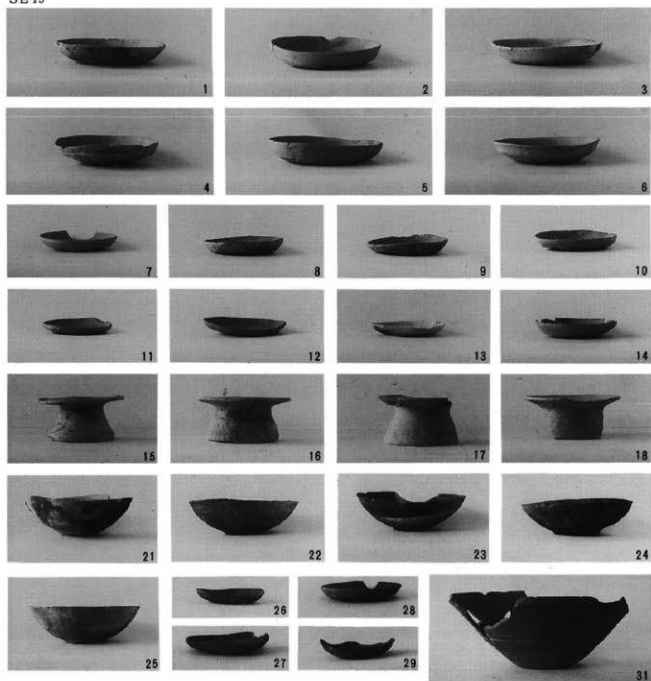


(第 7 図)

SE 03



SE 19



SE07



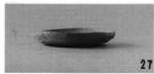
(第9図)

図版 12
土器 (7)

SE01



(第11図)



(第11図)



(第12図)



(第14図)

奈良女子大学構内遺跡
発掘調査概報 VI

平成 11 年 3 月 31 日 発行

編集 奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会
発行 奈良女子大学
印刷 株式会社 新踏社
